

藤原京右京十二条三坊・石川廃寺

—平成 28 年度発掘調査報告書—



2018

公益財団法人 元興寺文化財研究所

藤原京右京十二条三坊・石川廃寺

—平成 28 年度発掘調査報告書—

2018

公益財団法人 元興寺文化財研究所



SK035 出土遺物

序

飛鳥時代に日本にもたらされた仏教は、国家や有力氏族の庇護を受け、急速に発展を遂げていきます。日本で最初の本格的な伽藍を備えた飛鳥寺に始まる寺院造営は、『日本書紀』によれば、藤原京の時代には二十四ヶ寺にまで拡大したことが分かります。発掘調査による成果の積み重ねは、文献資料に登場する寺院の比定を可能にし、より具体的に仏教受容の実像を明らかにしてきました。

今回報告する調査地は、藤原京の南西部に位置します。ここは石川廃寺と呼ばれる白鳳時代に建立された寺院跡と考えられていますが、当時はどのような名前の寺院で、どれほどの規模を持つものであったかは解明されていません。この石川廃寺に関しては、蘇我氏が建立した石川精舎とする考え方や、平城京興福寺の前身である厩坂寺とする考え方など、議論が盛んに行われています。

発掘調査では、白鳳時代の瓦が多量に出土し、ここに白鳳時代の寺院があつたことを再確認しました。さらに大規模な整地の痕跡も見つかり、藤原京造営前夜の様子の一端も垣間見ることが出来ました。万葉集には、「大君は神にしませば赤駒のはらばう田井を都となしつ」「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ」と詠まれたように湿地の広がる風景だったようです。

これまでの調査で不明だった石川廃寺の具体的な構造については、明らかにはなりませんでしたが、今後の調査の課題として引き継がれていくものです。発掘調査の積み重ねによって、いくつか石川廃寺の実像に迫っていけるものと考えています。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告書刊行に至るまで、全面的にご協力いただきました関係各位に深く御礼を申し上げます。

平成30年3月31日

公益財団法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例言

1. 本書は藤原京（右京十二条三坊）・石川庵寺において、宅地造成に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県橿原市石川町 298-1 に所在し、開発面積 1,838.2m²のうち調査対象面積は 99m²である。
3. 調査は奈良県教育委員会から依頼を受け、株式会社井上地所より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、平成 28 年 8 月 17 日～同年 9 月 17 日を現地調査、同年 12 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は村田裕介、佐藤亞聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、武田浩子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、狭川典磨、安楽可奈子（奈良大学学生）が補佐した。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社アコードが分担した。
6. 本書で示す方位は座標北を使用した。座標基準は世界測地系（平面直角座標第 VI 系）に基づき、水準は T.P. によるものである。
7. 本書で使用した土色名および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』（日本色研事業株式会社）に準拠した。
8. 発掘調査における土工等土木部門は有限会社ワーカーに委託を行った。
9. 遺構写真撮影は村田、佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当した。
10. 出土遺物の実測および浄書は仲井光代、武田浩子、芝 幹（公益財団法人元興寺文化財研究所）、岩元亮祐（京都府立大学大学院生）が行った。
11. 藤原京の条坊呼称に関しては、岸俊男説に拠る。
12. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらに依拠している。
 - 奈良国立文化財研究所 1974 「奈良国立文化財研究所基準資料 I 瓦編 I 解説」
 - 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』 II 奈良国立文化財研究所学報第 31 冊
 - 西 弘海 1986 「七世紀の土器の時代区分と形式変化」『土器様式の成立とその背景』真陽社
 - 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
 - 川口宏海 1990 「16 世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』 VI 日本中世土器研究会
 - 佐藤亞聖 1996 「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』 XI 日本中世土器研究会
 - 佐藤亞聖 2016 「大和における瓦質土器鉢の編年」『元興寺文化財研究所研究報告 2015
13. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、株式会社井上地所が全額負担した。

14. 当該調査において出土した遺物、実測図や写真などの調査記録は樅原市教育委員会において保管している。
15. 本書の執筆は第4章を山口繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）、そのほかを村田が執筆した。
本書の編集は村田が行い、芝が補佐した。
16. 樅原市教育委員会より、未公表の1993年度発掘調査の図面および出土遺物の写真提供をいただいた。
17. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。

奈良県教育委員会、樅原市教育委員会、川上洋一、北山峰生、平岩欣太、岡田雅彦

目次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過（調査日誌抄）	2
第2章 周辺における既往の調査と課題	3
第3章 調査の成果	5
第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定	5
第1項 調査区の配置と基本層序・遺構面の設定	5
第2項 整地土出土遺物	5
第2節 第1遺構面の遺構と遺物	14
第1項 検出遺構	14
第2項 出土遺物	17
第3節 第2遺構面の遺構と遺物	30
第1項 検出遺構	30
第2項 出土遺物	31
第4節 表土出土遺物	39
第4章 自然科学分析	40
第5章 調査のまとめ	44
第1節 遺構の変遷について	44
第2節 瓦の組成について	44

図版目次

図1 今回の調査区と既往の調査地（S=1/5,000）	3
図2 周辺の遺跡（S=1/5,000）	4
図3 全体平面図（S=1/150）	6
図4 壁面土層断面図（S=1/40）	7
図5 整地土出土遺物実測図（1）（S=1/3）	9
図6 整地土出土遺物実測図（2）（S=1/4）	10
図7 整地土出土遺物実測図（3）（S=1/4）	11
図8 整地土出土遺物実測図（4）（S=1/4）	12
図9 整地土出土遺物実測図（5）（S=1/4）	13
図10 整地土出土遺物実測図（6）（S=1/3）	14
図11 SD010・015・020・030、SX013・025 土層断面図（S=1/40）	15
図12 SK035 平面・土層断面図（S=1/40）	17
図13 SD010出土遺物実測図（1）（S=1/2・1/3）	18
図14 SD010出土遺物実測図（2）（S=1/4）	19

図 15 SD010 出土遺物実測図 (3) (S=1/3・1/4)	20
図 16 SD010 出土遺物実測図 (4) (S=1/4)	21
図 17 SD015 出土遺物実測図 (S=1/3)	22
図 18 SD020 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	23
図 19 SD020 出土遺物実測図 (2) (S=1/4)	24
図 20 SD030 出土遺物実測図 (S=1/3)	25
図 21 SK035 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)	27
図 22 SK035 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)	28
図 23 SX025 出土遺物実測図 (S=1/3)	29
図 24 素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3)	30
図 25 SD018 土層断面図 (S=1/40)	31
図 26 SX040 土層断面図 (S=1/40)	31
図 27 SD018 出土遺物実測図 (S=1/3)	31
図 28 SX040 出土遺物実測図 (1) (S=1/3・1/4)	32
図 29 SX040 出土遺物実測図 (2) (S=1/4)	33
図 30 SX040 出土遺物実測図 (3) (S=1/3・1/4)	35
図 31 SX040 出土遺物実測図 (4) (S=1/4)	36
図 32 SX040 出土遺物実測図 (5) (S=1/3・1/4)	37
図 33 SX040 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)	38
図 34 表土出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	39
図 35 鉱滓	40
図 36 X線透過撮影像	41
図 37 グループ1の元素マップ	42
図 38 グループ2の元素マップ	43
図 39 グループ3の元素マップ	43
図 40 1993年度調査との位置関係 (S=1/300)	45
図 41 検出遺構配置略図 (S=1/200)	48

表目次

表1 出土瓦集計表	46
表2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)	49～55
表9・10 検出遺構および出土遺物一覧 (1)・(2)	56・57

写真目次

写真1 1993年度櫛原市教育委員会調査区出土 土製鋳型	29
------------------------------------	----

写真図版目次

卷頭図版	図版 13
SK035 出土遺物	SD010・015 出土遺物
図版 1	図版 14
第 1 遺構面全景（南から）	SD020 出土遺物
SD010 土層断面（北から）	図版 15
SD010・015 土層断面（北から）	SD020 出土遺物
図版 2	図版 16
SD010・015・020 土層断面（南から）	SD030 出土遺物
SD020 土層断面（北から）	図版 17
SD030 土層断面（西から）	SD030、SK035 出土遺物
図版 3	図版 18
SX025 土層断面（西から）	SK035、SX025 出土遺物
SK035 検出状況（西から）	図版 19
SK035 土層断面（西から）	SX025・040、SD018、素掘小溝出土遺物
図版 4	図版 20
第 2 遺構面全景（南から）	SX040 出土遺物
SD018 土層断面（西から）	図版 21
SX040 土層断面（南から）	SX040 出土遺物
図版 5	図版 22
SX040 完掘状況（北西から）	SX040 出土遺物
南壁（北から）	図版 23
東壁（南西から）	SX040 出土遺物
図版 6	図版 24
整地土出土遺物	SX040、表土出土遺物
図版 7	
整地土出土遺物	
図版 8	
整地土出土遺物	
図版 9	
整地土出土遺物	
図版 10	
整地土、SD010 出土遺物	
図版 11	
SD010 出土遺物	
図版 12	
SD010 出土遺物	

第1章 調査に至る経緯と調査体制

第1節 調査に至る経緯

平成28年4月6日付けで株式会社井上地所より宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受け平成28年6月9日に奈良県教育委員会は当地が藤原京の範囲であり、また石川庵寺の中に含まれていることから、橿原市教育委員会へ発掘調査の実施を指示、平成28年6月10日に橿原市教育委員会が試掘調査を実施し、敷地内に設定したトレンチの地表下0.93～1.0mにおいて遺構を確認した。この結果を受けて橿原市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始した。しかし、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断したため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

平成28年7月19日付けで奈良県教育委員会より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、平成28年8月2日、藤原京右京十二条三坊の発掘調査業務に係る委託契約を株式会社井上地所と締結、平成28年8月3日に発掘調査届出を提出のうえ、平成28年8月17日より現地調査を開始した。

現地調査は平成28年9月17日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、株式会社井上地所の全面的な支援・協力があった。また、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することができた。関係各位に感謝する次第である。

第2節 調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：橿原市教育委員会文化財課

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 辻村泰善（兼務）

副所長 狹川真一

事務局長 江島和哉

総合文化財センター長 塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー 金山正子

主務 角南聰一郎

主任研究員 佐藤亜聖

研究員 村田裕介（現地調査・整理報告担当）

坂本 俊（平成29年4月から）

現地作業員：有限会社ワーク

測量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社アコード

第3節 調査の経過（調査日誌抄）

平成28年

- 8月17日（水） 資機材の搬入。樋原市教育委員会立会いのもと調査区を設定する。
- 8月18日（木） 重機掘削開始。以前に建っていた集合住宅の基礎杭が多く掘削に手間取る。調査区北半では南北方向の溝を複数確認する。調査区の南東では樋原市教育委員会1993年度調査トレンドを確認する。
- 8月19日（金） 重機掘削完了。ノッチタンク搬入。
- 8月22日（月） 第1遺構面検出作業。地区杭およびベンチマークの設定を行う。
- 8月23日（火） 第1遺構面検出作業完了。検出状況の写真撮影を行い、遺構掘削を開始する。
- 8月24日（水） SD010掘削開始。A10区付近に炭化物を多量に含む箇所があったため、上層を暗シルト、炭化物を含む下層を褐砂として遺物を取り上げる。
- 8月25日（木） SD010に並行して、SD020の掘削を開始する。ともに白鳳時代の瓦が出土した。
- 8月26日（金） 引き続きSD010、020の掘削を行う。SD010のA10区付近で確認した炭化物はSD020まで続いていることが分かり、SD010とは別遺構であることが判明。週末に予想される台風に備えて養生を行う。
- 8月30日（火） 前日までの雨により、調査区壁のうち、試掘の部分が南北2カ所で崩落したため、復旧作業に追われる。
- 8月31日（水） 調査区南半の遺構の掘削を行う。遺構の輪郭は不整形なものが多い。
- 9月1日（木） SD010がA・B10区付近から急に深く広くなり、SX013手前で東西方向にT字に分岐することを確認。
- 9月3日（土） SD010南肩付近、灰色粘土の下層に褐砂、暗色粘土の堆積を確認。古段階の堆積と判断し掘削を行ったが、整地土下の堆積である可能性が高まる。
- 9月5日（月） 調査区壁を精査し、写真撮影を行う。
- 9月6日（火） 第1遺構面全景写真撮影。
- 9月7日（水） サブトレンドを2ヶ所設定し、整地土以下の堆積を確認。整地土の厚さは概ね30cmを測り、整地土下には、谷地形と考えられる落ち込みがあることが判明。
- 9月8日（木） SK035を掘削。下層は炭化物が主体であり、炭化物に混じって鉱滓が出土する。途中、降雨により中断。
- 9月9日（金） SK035を完掘。整地土の掘り下げ開始。
- 9月15日（木） 整地土掘り下げ完了。SX040掘削開始。SX040最上層の淡褐色砂から藤原京期の瓦などが多く出土することから、淡褐色砂は整地土と一連のものであると判明。
- 9月17日（土） 遺構掘削完了。第2遺構面全景写真撮影。埋戻しを行い、現地調査を終了する。

第2章 周辺における既往の調査と課題

調査地は権原市石川町 298-1 に位置する。藤原京内の南西部に位置し、調査地は右京十二条三坊北西坪に当たる。また、調査地はかつて浦坊廃寺・ウラン坊廃寺と呼ばれていた石川廃寺の範囲内にある。条里呼称においては、十市郡路東二十八条一里十八坪にあたり、字名は「北口」である。調査地のすぐ南には古代の山田道を踏襲した県道 124 号線が東西に走る。近傍には、東に和田廃寺、北東に田中廃寺、西に久米寺跡、南西に軽寺跡など白鳳時代に遡る寺院が確認されている。石川廃寺の範囲内では、現在は所在不明だが、かつて付近に花崗岩製の唐居敷が存在していた。また古瓦の出土もみられ、この地を石川精舎とする考え（保井 1932）や平城京興福寺の前身である厩坂寺とする考え（福山 1934）もある。

今回の調査地である右京十二条三坊内では、これまでにも権原市教育委員会による調査（権教委 1993-9 次調査、1994-22 次調査、2004-15 次調査、2008-5 次調査、2011-1 次調査など）が行われ、藤原京期の建物跡、道路跡などが確認されている。調査区の北側で行われた 2011-1 次調査では、西三坊大路東側溝が検出され、「京」と墨書きされた須恵器片が出土している。一方、調査区の南側で行われた 2011-2 次調査では、藤原京期の井戸、柱穴を検出し、さらに 7 世紀前半に遡る遺構も確認されている。いずれの調査でも藤原京期の整地土が確認されているが、石川廃寺の具体像を示す遺構については不明である。これまでの他の調査も含め、発掘調査による寺域の復元などに関わる成果はほとんどなく、瓦などの出土がみられるのみでとどまっている。出土する瓦は川原寺式の範疇に含まれるもので、軒瓦としては、四重弧文軒平瓦や、「石川寺式」として知られる重圓文縁複弁八葉蓮華軒丸瓦などがある。

今回の調査区は、権教委 1993-9 次調査区の西側に接する位置に設定され、北側では同調査区の西側への張り出し部の南側に位置している。西側張り出し部では南北方向の溝が確認されており、本調査区でもその延長が検出されることが想定された。加えて、藤原京期の建物遺構のほか、本調査区の東側に想定されている石川廃寺に関連する遺構・遺物についても検出が想定された。

参考文献

- 保井芳太郎 1932 「大和上代寺院志」
- 福山敏夫 1934 「葛木寺及び厩坂寺の位置について」『大和志』
- 第1巻第3号

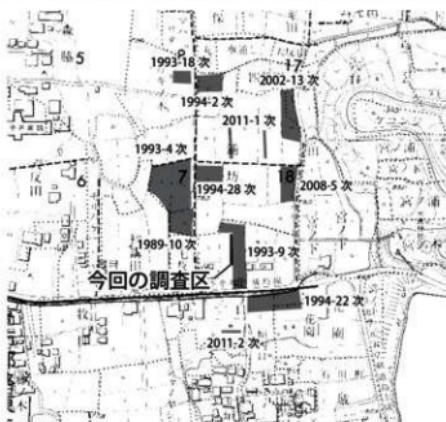
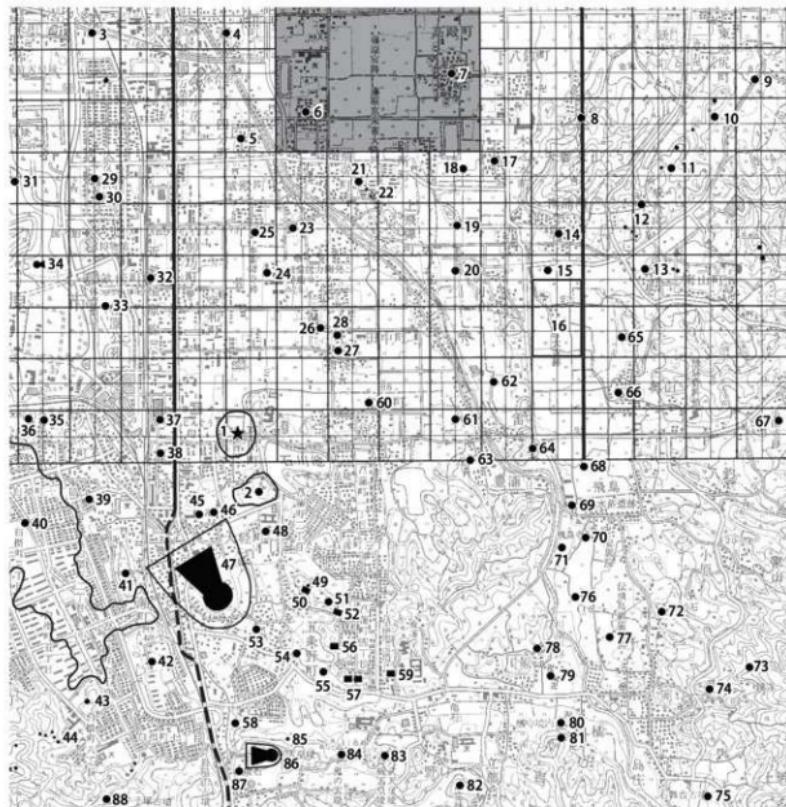


図1 今回の調査区と既往の調査地 (S=1/5,000)



1. 石川庵寺跡
2. 土石城跡
3. 四条道跡
4. 獅子道跡
5. 四分環濠
6. 四分道跡
7. 高殿環濠
8. 香久山北麓道跡
9. 中嶺道跡
10. 三堂山瓦窯跡
11. 戒外山城跡
12. 興善寺跡
13. 赤山道跡
14. 日向寺跡
15. 大官大寺跡北方道跡
16. 大官大寺跡
17. 木之本環濠
18. 木之本道跡
19. 紀寺跡
20. 紀寺南道跡
21. 日高山瓦窯跡
23. 城殿遺跡
24. 濱田道跡
25. 本業師寺跡
26. 田中寺跡
27. 田中環濠
28. 田中宮跡
29. 大久保環濠
30. 大窟寺跡
31. 大窟道跡
32. 銀坊道跡
33. 楠原遺跡
34. イトクノモリ古墳
35. 久米寺跡
36. 久米寺瓦窯跡
37. 六丈北道跡
38. 六丈南道跡
39. 久米ジカミ子道跡
40. 緑田池跡
41. 尾寺山遺跡
42. 見瀬城跡
43. 沼山古墳
45. 軽寺瓦窯跡
46. 軽寺跡
47. 丸山古墳
48. 江北古跡
49. 五条野坂山北古墳
50. 楠山古墳
51. 五条野村垣遺跡
52. 五条野村内古墳
53. 五条野城跡
54. 五条野山イ道跡
55. 五条野山城跡
56. 五条野城古墳
57. 五条野谷ヶ原1・2号墳
58. サ力中道跡
59. 畠浦古墳
60. 和田麻寺
61. 小畠田古推定地
62. 雷丘北古道跡
63. 富浦寺跡
64. 雷丘東古道跡
65. 三堂山瓦窯跡
66. 山寺跡
67. 石神道跡
68. 飛鳥水落道跡
69. 飛鳥寺西方道跡
70. 飛鳥寺跡
71. 飛鳥寺瓦窯跡
72. 飛鳥寺古跡
73. 開立石
74. 開寺跡
75. 石舞台古墳
76. 飛鳥京跡苑池
77. 飛鳥板蓋宮伝承地
78. 川原寺裏山道跡
79. 川原寺跡
80. 橋寺
81. 橋寺瓦窯
82. 定林寺跡
83. 文武・持統天皇陵
84. 鬼の雪闘
85. 細塚古墳
86. 欽明天皇陵
87. 猪石

図2 周辺の遺跡 (S=1/5,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査区の配置と基本層序・遺構面の認定

第1項 調査区の配置と基本層序・遺構面の設定

調査区の設定については、試掘結果をもとに影響の及ぶ開発対象地の中心部に東西約3m、南北約33mのトレーナーを設定した。調査区北側および東側には、樋原市による1993年度の調査区が近接し、東側では一部が重複する。

基本層序は、現地表面から厚さ約0.75mの造成土、厚さ約0.2mの旧耕土、厚さ約0.2mの遺物包含層である暗灰黄色土、厚さ約0.3mの藤原京期の整地土である褐色土から構成される。暗灰黄色土を除去した褐色土上面を第1遺構面と認定した。標高は約78.4mである。

整地土である褐色土は調査区のほぼ全域で確認され、土器や瓦などの遺物が含まれる。出土遺物の様相から整地土は藤原京期のものと考えられる。これを除去すると、調査区北半では黄褐色を呈するシルトとなり、この上面を第2面と認定した。標高は約78.1mである。整地土を除去すると、調査区北半で検出した黄褐色シルトからは、遺物の出土が認められないことから、これを地山と判断した。調査区南半ではSX040が検出され、出土遺物から古墳時代から藤原京期以前にかけての谷地形への自然堆積層と考えられる。調査区南半で検出したSX040は、調査時の安全を確保するため完掘には至らなかった。

第2項 整地土出土遺物

整地土出土遺物（図5～10、図版6～10）

土師器杯（1・2）1は杯Aである。外面に横方向のヘラミガキ調整、内面は下半に正放射状暗文、上半に斜放射状暗文を施す。2は杯Bである。内外面ともナデ調整を施し、内面は口縁部に正放射状暗文、見込みにラセン状暗文を施す。

土師器皿（3・4）3は皿Aである。外面は口縁部下半から底部にかけて、ヘラケズリ調整を施し、底部付近にはユビオサエ痕が残る。内面は表面劣化のため調整不明である。4は皿である。内外面ともに口縁部にヨコナデ調整、底部にナデ調整を施し、底部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁端部内外面に煤が付着する。

土師器竈（5）外面にナデ調整、内面に横方向のハケメ調整を施し、内面にはユビオサエ痕が残る。外面には「U」字状に底を貼り付け、その内側に「U」字状の開口部を設けたと考えられる。

須恵器蓋（6～8）6・7は杯H蓋である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整を施す。6の天井部外面は回転ヘラキリ後未調整で、天井部内面には一方向のナデ調整を施す。8は内外面ともに回転ナデ調整後、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内面にはかえりを持つ。

須恵器杯（9～11）9は杯Aである。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部外面は回転ヘラキリ後

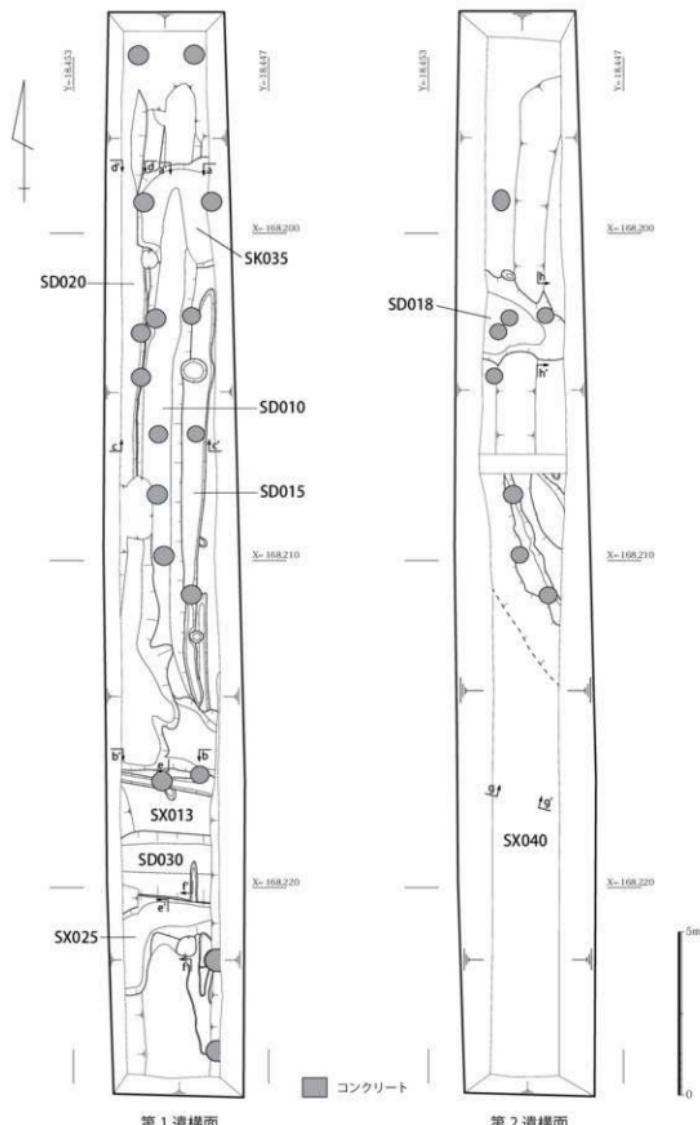


図3 全体平面図 (S=1/150)

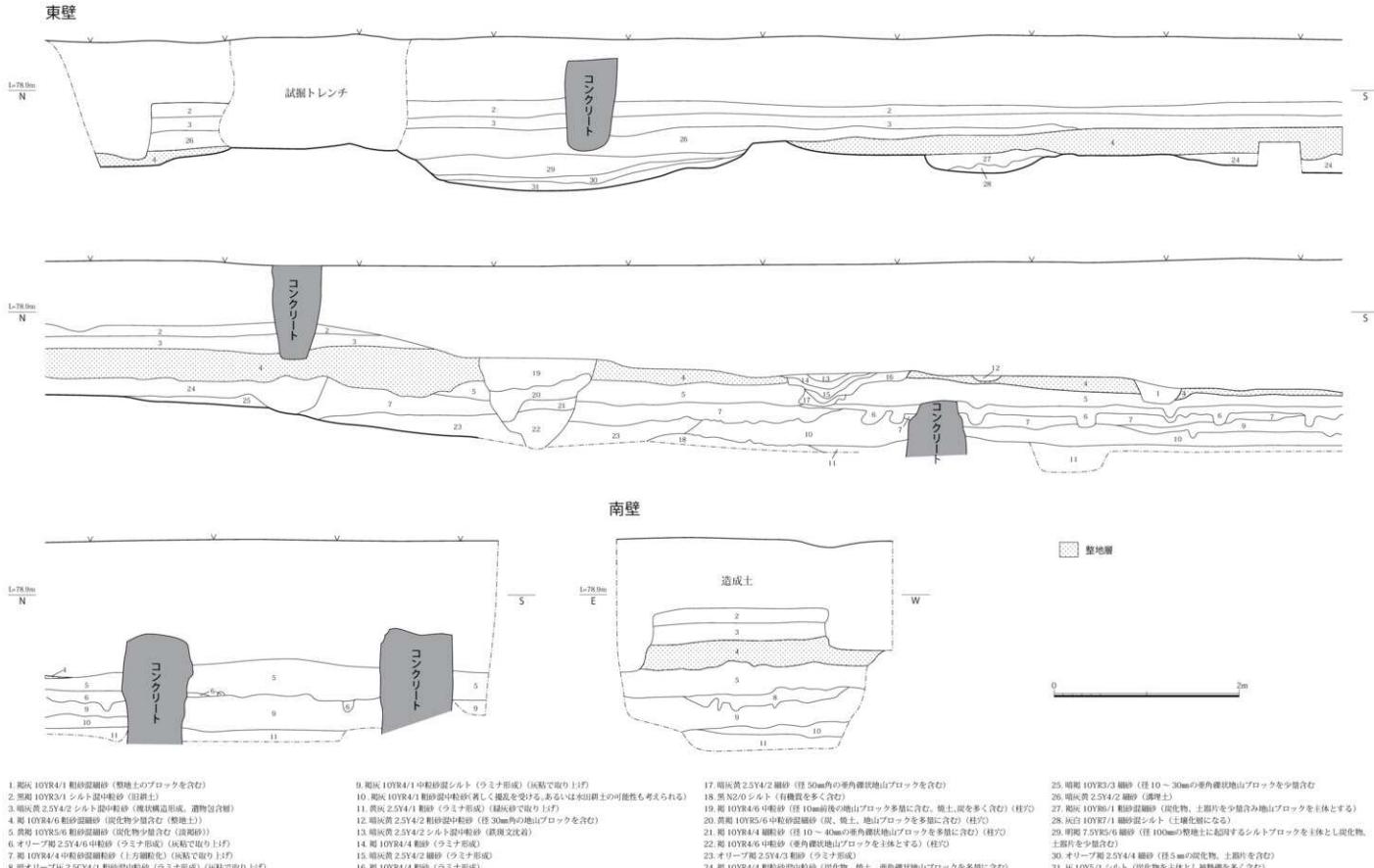


図4 壁面土層断面図 (S=1/40)

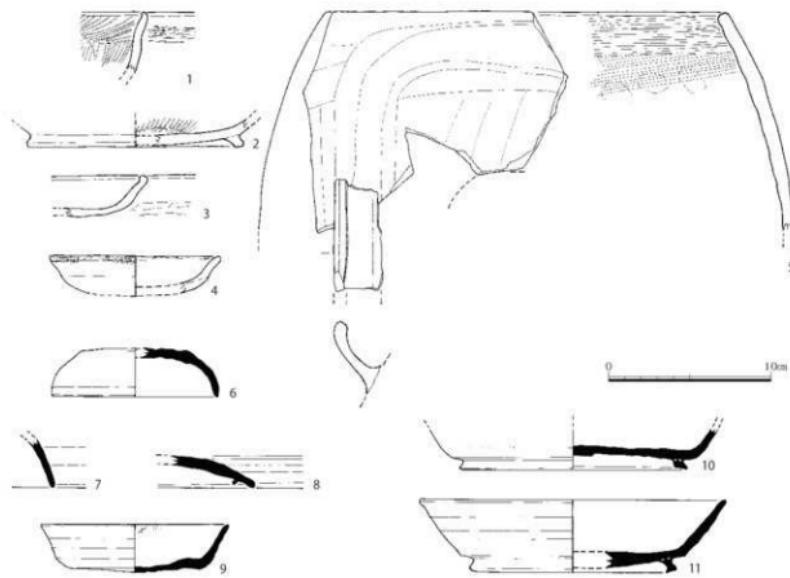


図5 整地土出土遺物実測図(1) (S=1/3)

未調整である。口縁端部付近の内面に煤が付着する。10・11は杯Bである。内外面ともに回転ナデ調整を施す。10の底部外面は回転ヘラキリ後未調整である。

軒平瓦(12・13) 四重弧文軒平瓦である。瓦当は型挽きによる施文で、顎貼り付けで成形する。12は四面には布目痕が残り、側縁に面取りを行う。13は凹線が浅く、胎土に5mm程度の砂粒が含まれ、焼成もやや甘いなど、12とは明確に異なる特徴を持っている。

丸瓦(14～17) 14・15は玉縁丸瓦である。14は凸面にナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕を残す。15は凸面に繩タタキ後ナデ調整を施し、凹面の側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。16は行基丸瓦である。凸面に斜格子タタキ後ナデ調整を施し、凹凸両面の側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。17は凸面に平行タタキ後ナデ調整を施し、凹凸両面の側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。

平瓦(18～30) 18は凸面に斜格子タタキ後一部にナデ調整、凹面にナデ調整を施す。凹面には布目痕が残る。19～21は隅切瓦である。19は凸面に斜格子タタキ後一部にナデ調整、凹面にナデ調整を施す。20・21は凸面に繩タタキを施し、凹面各縁には面取りを行う。凹面は無調整で布目痕、模骨痕が残る。22は凸面に繩タタキ、凹面の縁辺部にナデ調整を施す。凹面には布目痕、糸切痕が残る。23は凸面に繩タタキ、凹面の縁辺部にナデ調整を施し、凹面各縁に幅の広い面取りを行う。凹面には布目痕、模骨痕が残る。24は凸面に繩タタキ、凹面の縁辺部にナデ調整を施す。広端側面には切断の際に移動した砂礫による凹線がみられる。凹面には布目痕、模骨痕が残る。25は凸面に繩タタキを施し、凹面各縁に面取りを行う。凹面には布目痕、模骨痕、糸切痕が残る。26は凸面に繩タタキ、凹面の縁辺部

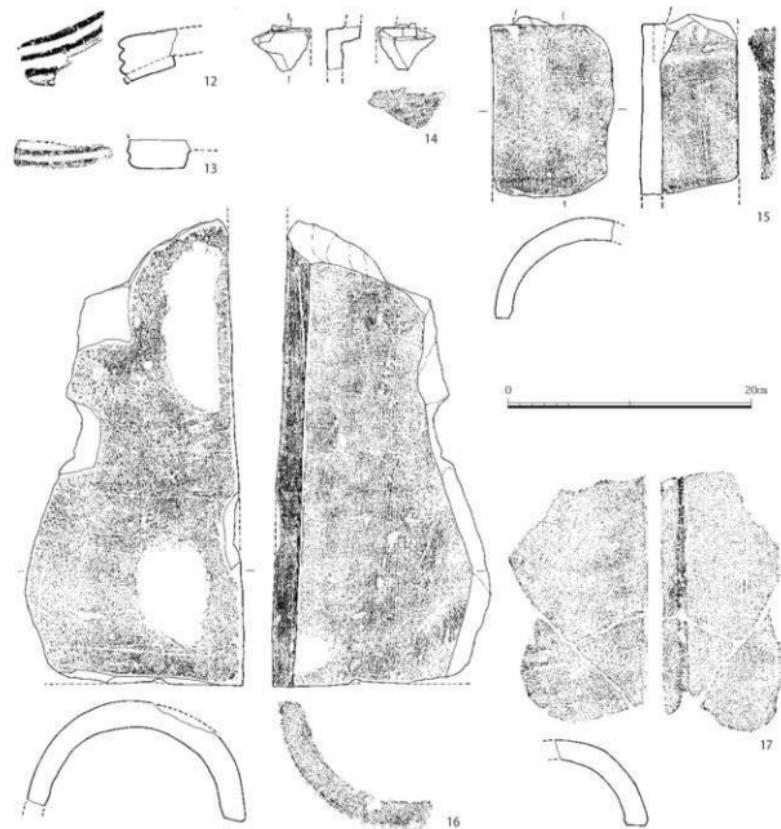


図6 整地土出土遺物実測図(2) (S=1/4)

などにナデ調整を施す。凹面には布目痕、模骨痕が残る。27は凸面に縄タタキ後ナデ調整、凹面にナデ調整を施す。凹面には布目痕が僅かに残る。28は隅切瓦である。凹凸両面にナデ調整を施す。凹面には模骨痕が残る。29は凸面にナデ調整、凹面にヘラケズリ調整を施す。30は凸面にナデ調整、凹面の縁辺部にヘラケズリ調整を施し、凹面側縁に面取りを行う。凹面には布目痕及び縦紐痕、模骨痕、糸切痕が残る。

埴輪(31) 朝顔形埴輪の口縁部である。外面は縦方向のハケメ調整、内面は縦方向のハケメ調整後、上半に斜め方向のハケメ調整を施す。口縁部下端にはユビオサエ痕が残る。内面には黒斑が観察できる。口縁端部は外方に肥厚し、上方に面を持つ。

土製品土鍤(32) 内外面ともにナデ調整を施す。内面には接合痕がみられることから板状粘土を丸めて成形したことが分かる。両端部は面を持つ。外面には黒斑が観察できる。

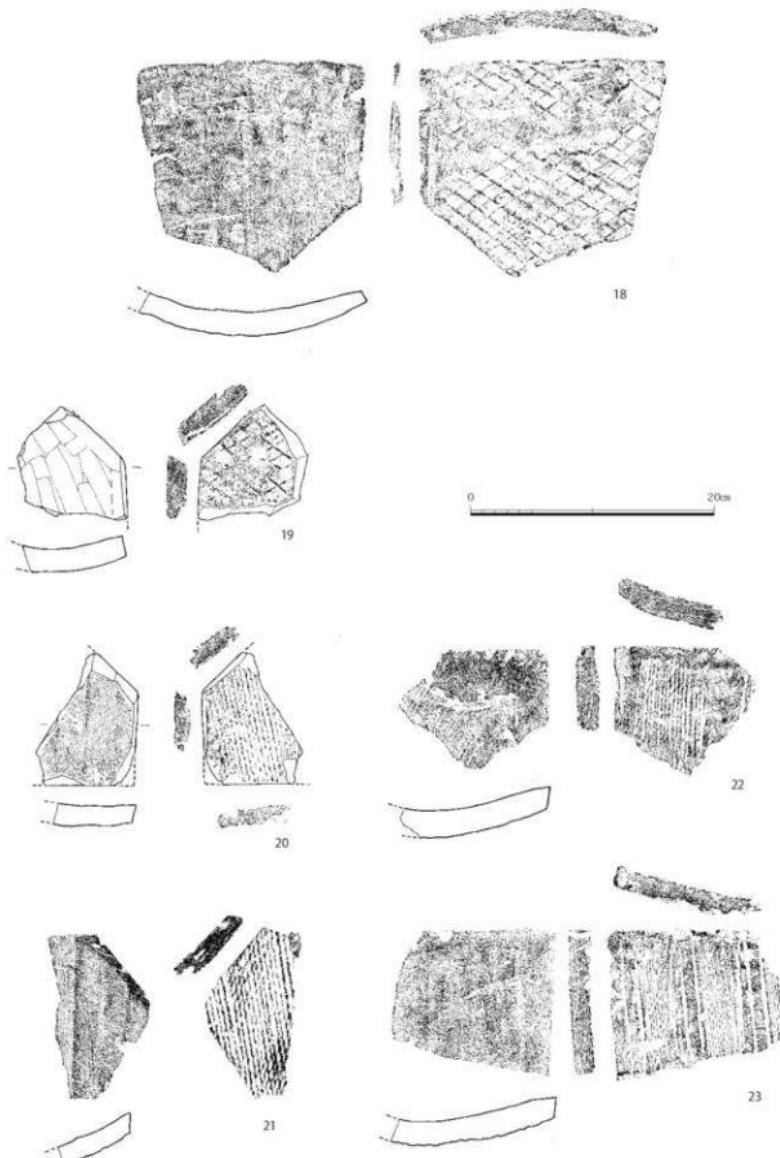


図7 整地土出土遺物実測図(3) (S=1/4)

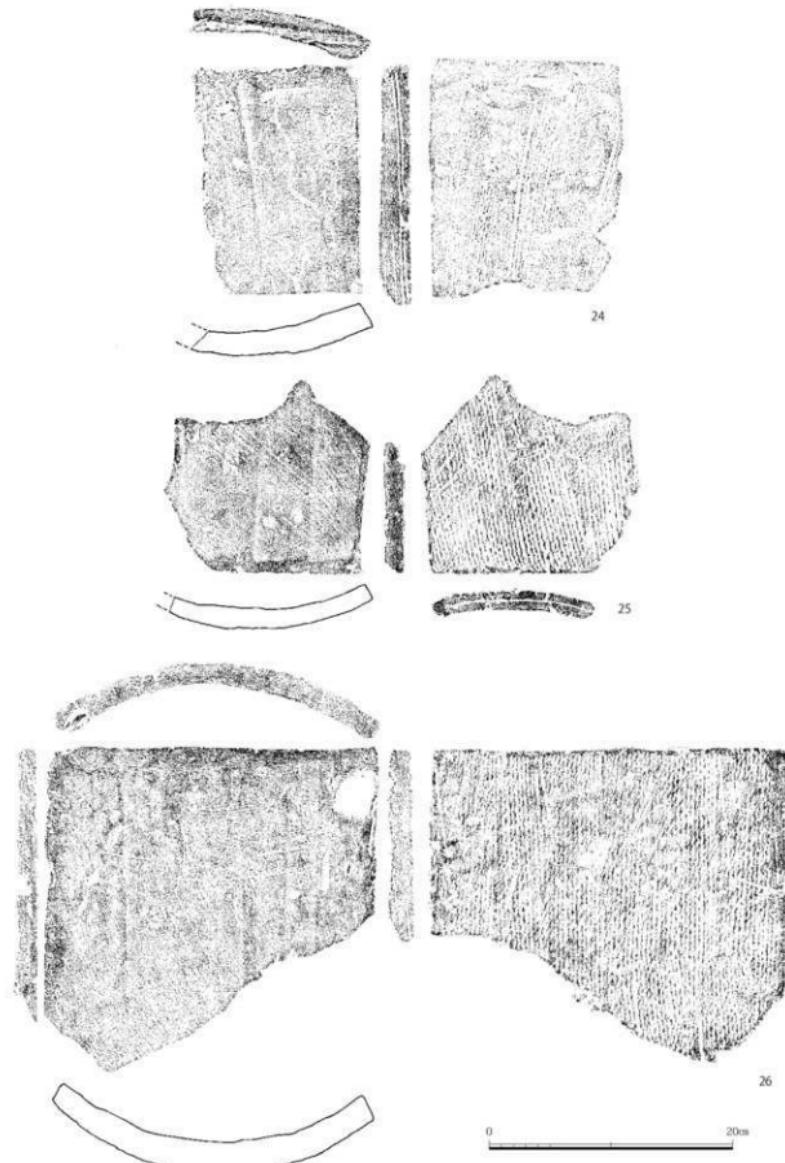


図8 整地土出土遺物実測図(4) (S=1/4)

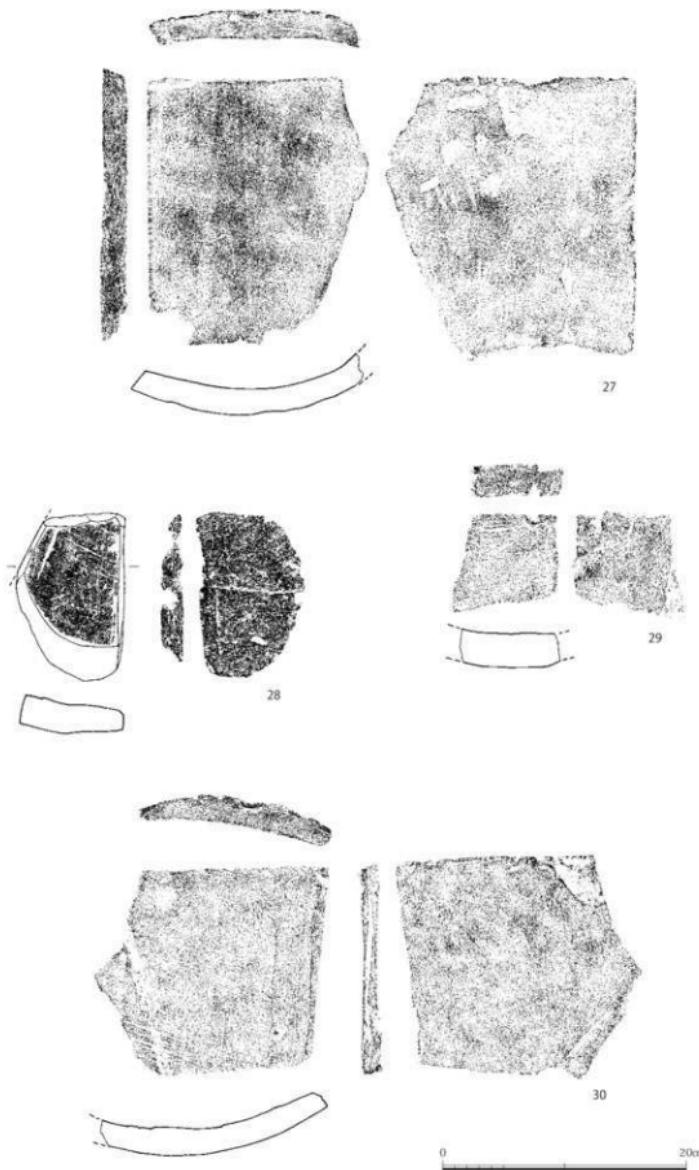


図9 整地土出土遺物実測図(5)(S=1/4)

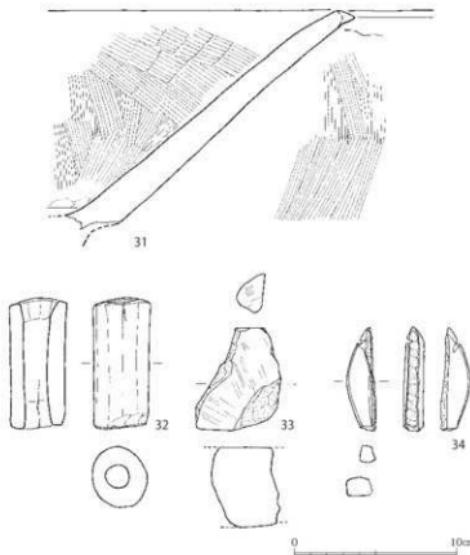


図 10 整地土出土遺物実測図 (6) (S=1/3)

石製品砥石（33）凝灰岩製である。4面に砥面が残る。重さ 149.5g を測る。

不明青銅製品（34）断面方形を呈し、厚さ 1.2mm、重さ 60.5g を測る。直線部分には整状の工具で切断された痕跡が残る。水煙もしくは風招の一部の可能性がある。

第 2 節 第 1 遺構面の遺構と遺物

第 1 項 検出遺構

溝

SD010 (図 11、図版 1・2)

調査区中央から北半へかけて検出した南北方向の溝である。南端部で広くなり、調査区外東西へ続くことから、東西方向の溝と接続したものと考えられる。重複関係から SDO15・020 に後出す。幅 1.5m、深さ 0.4m を測るが、南端付近では幅が広くなり、深さも増す。断面形態は逆台形ないし「U」字形を呈する。埋土は大きく 2 層に分けられ、上層から暗色シルト、灰色粘土である。断面観察からは幾度かの掘り直しがうかがえる。一部にはラミナの形成が認められ、一時的には流水状態にあったことが分かるが、全体的には流水のない状態での自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物から 14 世紀には機能し、15 世紀半ばに埋没したと考えられる。

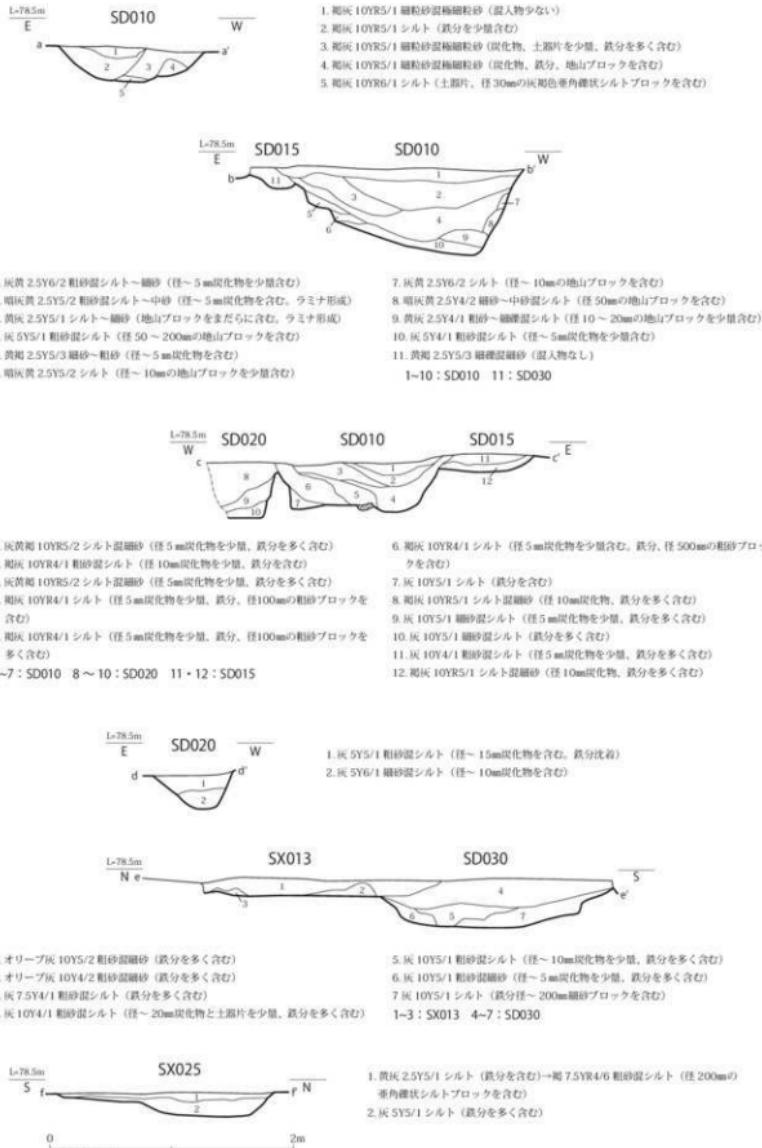


図11 SD010・015・020・030・SX013・025 土層断面図 (S=1/40)

SD015 (図 11、図版 1・2)

調査区中央部から北半の東寄りで検出した南北方向の溝である。重複関係から SD010 に先行する。幅は西肩が SD010 により破壊されているため正確ではないが、約 0.9m と推測できる。深さは 0.15m を測り、断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は褐灰色シルト～細砂を主体とする。流水の痕跡はなく、自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物から 8 世紀半ばに埋没したと考えられる。

SD020 (図 11、図版 2)

調査区中央部から北半の西寄りで検出した南北方向の溝である。重複関係から SD010 に先行する。幅は西肩が調査区外となるため不明であるが、調査区内での検出幅は約 0.6m である。深さは 0.45m を測り、断面形態は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルトを主体とする。流水の痕跡はなく、自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物から 8 世紀半ばに埋没したと考えられる。

SD030 (図 11、図版 2)

調査区南寄りで検出した東西方向の溝で、調査区外東西へと続く。重複関係から SX013・025 に先行する。幅は北肩が SX013 により破壊されているため不明であるが、検出できた幅は 1.8m である。深さは 0.4m を測り、断面形態は「U」字形を呈する。埋土は灰色シルトを主体とする。流水の痕跡はなく、自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物から 15 世紀後半に埋没したと考えられる。

土坑**SK035** (図 12、図版 3)

調査区南寄りで検出した土坑で、東は調査区外へと続く。重複関係から SD010・020 に先行する。全体的に遺構の破壊が著しく、平面形態は不明だが、平面規模は南北で 3.4m、調査区内での検出範囲は東西 2.2m、深さ 0.35m を測り、断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は大きく 2 層に分けられ、上層から明褐色細砂、灰色シルトである。灰色シルトからは、土器小片のほか、銅滓・鉄滓、炉壁、炭化物など金属製品生産に関わる遺物が多く出土しており、これらを廃棄後、人為的に埋め戻したものと考えられる。

出土遺物から藤原京期に埋没したと考えられる。

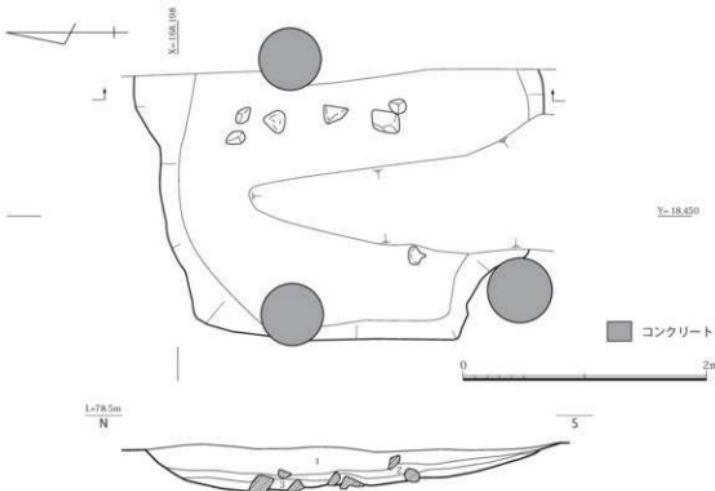
落ち込み**SX013** (図 11)

調査区南寄りで検出した落ち込みで、調査区外東西へと続く。重複関係から SD010 に先行し、SD030 に後出す。平面形態は不整形で、平面規模は検出された範囲では南北 1.95m、深さ 0.15m を測る。埋土は明褐色細砂を主体とし、下層の整地土に由来するブロック土を多く含むことから、人為的に埋め戻したものと考えられる。

出土遺物は土器や瓦があるが、遺構の埋没時期を明らかにできるものは無い。重複関係から 15 世紀後半以降に埋没したと考えられる。

SX025 (図 11、図版 3)

調査区南端で検出した落ち込みで、調査区外東西へと続く。重複関係から SD030 に先行する。平面



1. 明開 7.5Y R5/6 細砂（径100mmの粗粒土に起因するシルトブロックを中心とした炭化物、土塊片を少額含む）
 2. オリーブ開 2.5Y 4/4 細砂（径～5mm炭化物、土塊片を多額に含む）
 3. 深 10Y 5/1 シルト（炭化物を主体とした被熱磚を多く含む）

図12 SK035 平面・土層断面図 (S=1/40)

形態は不整形で、平面規模は検出された範囲では南北最大1.8m、深さ0.2mを測る。

出土遺物は13世紀前半までのものだが、SD030との重複関係から15世紀後半以降に埋没したと考えられる。

素掘小溝

調査区南半に数条みられる。幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mを測り、耕作に関連すると考えられるものである。本調査区では南北方向のものに限られる。

出土遺物から13世紀前半に埋没したと考えられる。

第2項 出土遺物

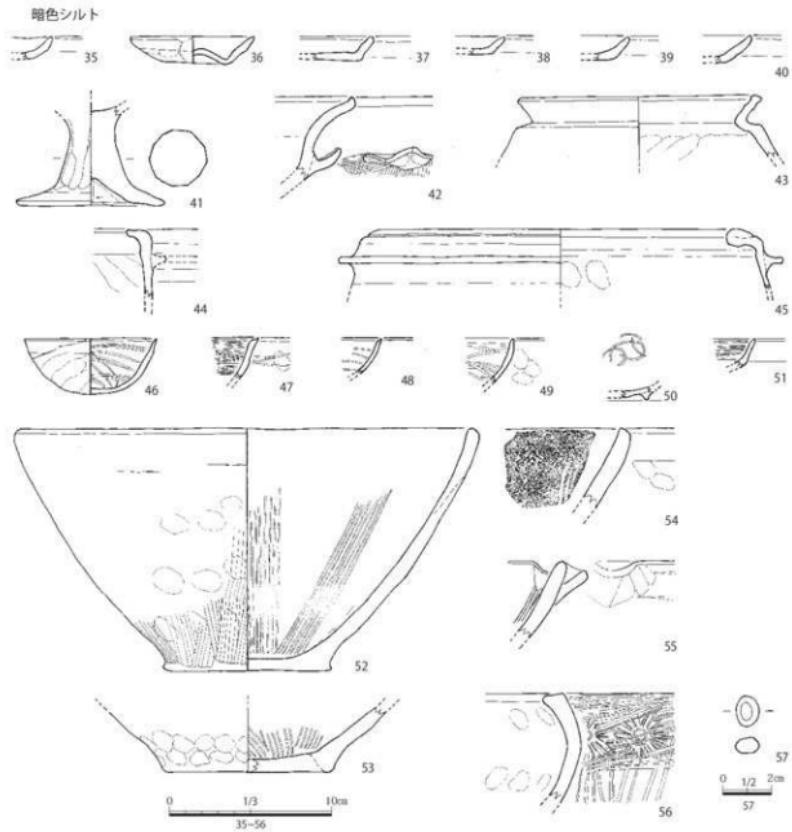
SD010 出土遺物 (図13～16、図版10～13)

暗色シルト

土師器皿(35～40) いずれも口縁部をヨコナデ調整し、底部にナデ調整を施す。外底面にはユビオサ工痕が残る。

土師器高杯(41) 脚裾部は内外面ともにヨコナデ調整、脚部内面には横方向のヘラケズリ調整、脚柱部外側には縦方向のヘラケズリ調整、杯部内面にはナデ調整を施す。

土師器鍋(42) 口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、体部は外側に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。把手にはユビオサ工痕が残り、体部への貼り付け後縦方向のハケメ調整を施す。

図 13 SD010 出土遺物実測図 (1) ($S=1/2 \cdot 1/3$)

土師器釜 (43 ~ 45) 43 は大和 I 型である。体部は内外面ともにナデ調整し、肩部内面にはユビオサエ痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。口縁端部には煤が付着する。44・45 は大和 II 型である。44 は体部には内外面ともにナデ調整を施す。外面に貼り付く鉗は欠損しているが、貼り付けに伴いヨコナデ調整が施される。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整する。口縁部および体部外面には煤が付着する。45 は内外面ともにヨコナデ調整を施し、体部内面にはユビオサエ痕が残る。体部外面には煤が付着する。

瓦器椀 (46 ~ 50) 46 ~ 49 は大和型瓦器椀である。46 は外面にはナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。口縁部内面には沈線がめぐり、内面には横方向のヘラミガキ調整を施す。47 は外面にナデ調整後横方向のヘラミガキ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。口縁部内面には沈線がめぐり、内面には横方向のヘラミガキ調整を密に施す。48 は外面にナデ調整を施す。口縁部内面には沈線がめぐり、内面

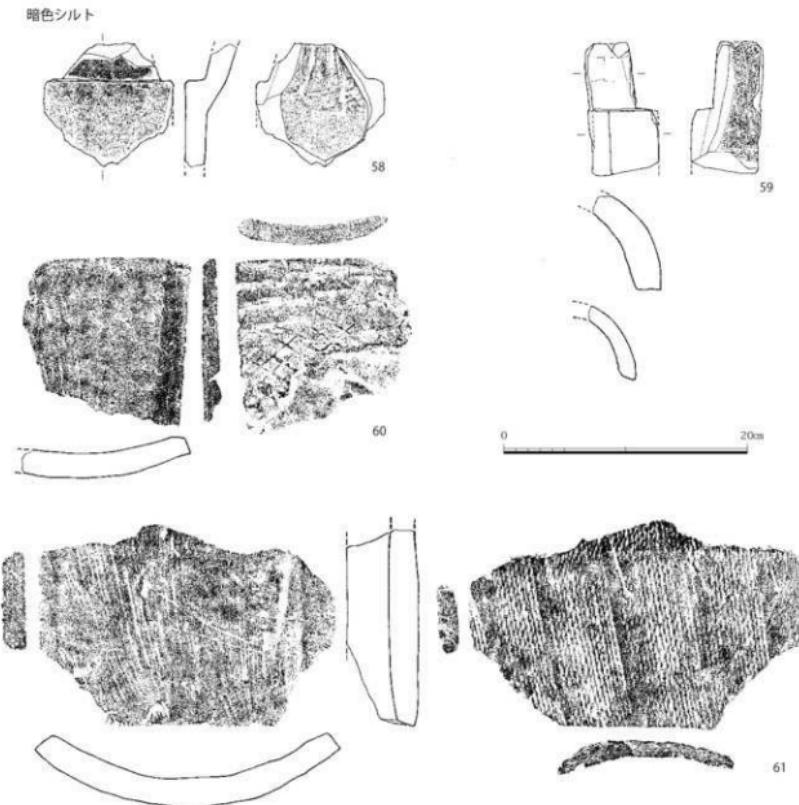


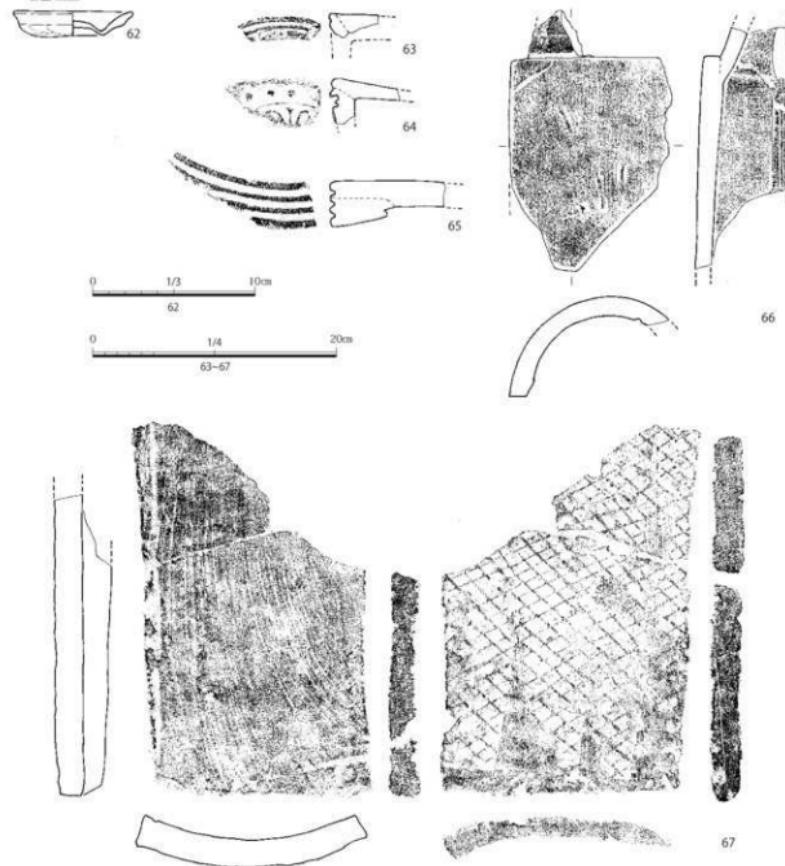
図 14 SD010 出土遺物実測図 (2) (S=1/4)

には横方向のヘラミガキ調整を施す。49は外面にナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。口縁部内面にはス線がめぐり、内面には横方向のヘラミガキ調整を施す。外面には重ね焼きの痕跡が残る。50は外面にナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。内面見込み部には連結輪状暗文を施す。

瓦器皿(51) 外面にヨコナデ調整、内面に横方向のヘラミガキ調整を密に施す。

瓦質土器擂鉢(52～55) 52はC型式である。外底面にナデ調整を施し、体部は外面に縦方向のハケメ調整、内面には9条一単位の擂目を施す。擂目は体部下半を中心にして磨滅している。体部外面にはユビオサエ痕が残る。53は外面にナデ調整を施し、底部付近体部外面にはユビオサエ痕が残る。内面には5条一単位の擂目を施す。内面は全体的に磨滅が著しい。54はC型式である。口縁端部を内外面ヨコナデ調整し、体部外面にはナデ調整を施す。体部外面にはユビオサエ痕が残る。内面には擂目を施す。55は片口部である。口縁端部を内外面ヨコナデ調整し、片口部はナデ調整により成形される。体

暗色粘土

図15 SD010出土遺物実測図(3) ($S=1/3 \cdot 1/4$)

部にはナデ調整を施す。内面には擂目を施す。

瓦質土器鉢 (56) 大和産円形浅鉢である。内外面ともにヨコナデ調整し、外面には縦方向のヘラミガキ調整後、口縁端部付近に横方向のヘラミガキ調整を施す。ヘラミガキ調整前には16弁菊花スタンプを二個以上押印する。

石製品碁石 (57) 石英製である。重さ1.3gを測る。

丸瓦 (58・59) 玉縁丸瓦である。58は凸面に縄タタキ後ナデ調整を施す。凹面は玉縁内面にはヘラケズリ調整を施し、布目痕が残る。59は凸面にナデ調整を施す。凹面は側縁部にヘラケズリ調整を施し、布目痕が残る。内面および玉縁外間に面取りを行う。

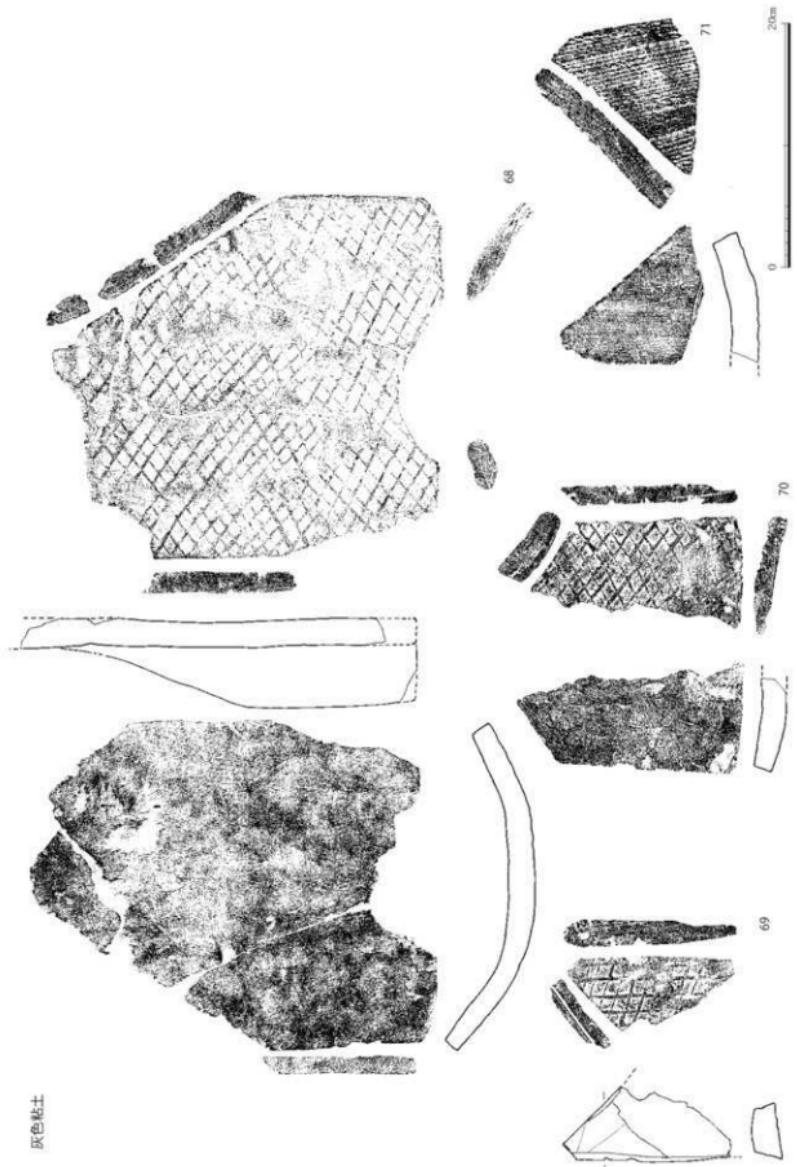


図16 SD010出土遺物実測図(4) (S=1/4)

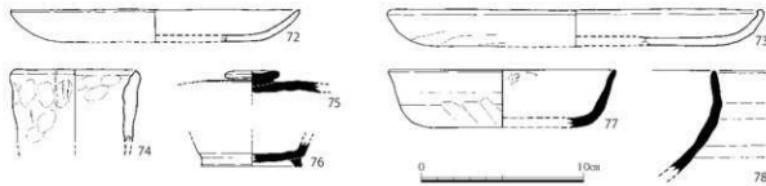


図 17 SD015 出土遺物実測図 (S=1/3)

平瓦 (60・61) 60は凸面に斜格子タタキ後一部にナデ調整、凹面にナデ調整を施し、凹面側縁に面取りを行う。凹面には布目痕が残る。61は凸面に縄タタキ、凹面側縁部にヘラケズリ調整を施す。凹面には布目痕、糸切痕が残る。

灰色粘土

土師器皿 (62) 口縁部をヨコナデ調整し、底部にナデ調整を施す。外底面にはユビオサエ痕が残る。

軒丸瓦 (63・64) 63は外区に三重の圓線をめぐらせる。丸瓦部にはナデ調整を施す。丸瓦部凹面の瓦当との接合面にはキザミ目を入れる。64は外区に珠文をめぐらせ、内区には蓮華文が表現される。瓦当裏面、丸瓦部凹凸両面にはナデ調整を施す。

軒平瓦 (65) 四重弧文軒平瓦である。瓦当は型挽きによる施文で、顎貼り付けで成形する。凸面にナデ調整、凹面にヘラケズリ調整後ナデ調整を施す。

丸瓦 (66) 玉縁丸瓦である。凸面に縄タタキ後ナデ調整を施し、凹面の側縁に面取りを行う。玉縁凸面にはナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕が残る。

平瓦 (67～71) 67は凸面に斜格子タタキを施す。凹面は無調整で布目痕、糸切痕、分割裁線が残る。他の平瓦に比べると幅が狭く、熨斗瓦として製作された可能性がある。68～71は隅切瓦である。68・69は凸面に斜格子タタキ、凹面にナデ調整を施し、68の凹面には布目痕がわずかに残る。70は凸面に斜格子タタキ、凹面にナデ調整、凹面側辺部にはヘラケズリ調整を施す。凹面には布目痕が残る。71は凸面に縄タタキを施す。凹面は無調整で布目痕、模骨痕が残る。

SD015 出土遺物 (図 17、図版 13)

土師器皿 (72・73) いずれも皿 Aである。72は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。73は内面及び口縁部外面は表面劣化のため調整不明であるが、外底面にはヘラケズリ調整を施す。

土師器製塙土器 (74) 内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部はヨコナデ調整する。外面及び内面白縁部付近にはユビオサエ痕が残る。外面は二次焼成により被熱する。

須恵器蓋 (75) 内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。

須恵器杯 (76・77) 76は杯 Bである。内外面ともに回転ナデ調整を施す。77は杯 Aである。内外面ともに回転ナデ調整後、外面体底部界にナデ調整を施す。口縁部内面には煤が付着する。

須恵器鉢 (78) 鉢 Aである。内外面ともに回転ナデ調整を施す。

SD020 出土遺物 (図 18・19、図版 14・15)

土師器杯 (79～81) 79は杯 Cである。口縁端部にヨコナデ調整、内面には斜放射状暗文を施したものと考えられるが、内外面ともに表面劣化のため詳細な調整は不明である。80・81は杯 Aである。80は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面には斜放射状暗文を施す。81は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。

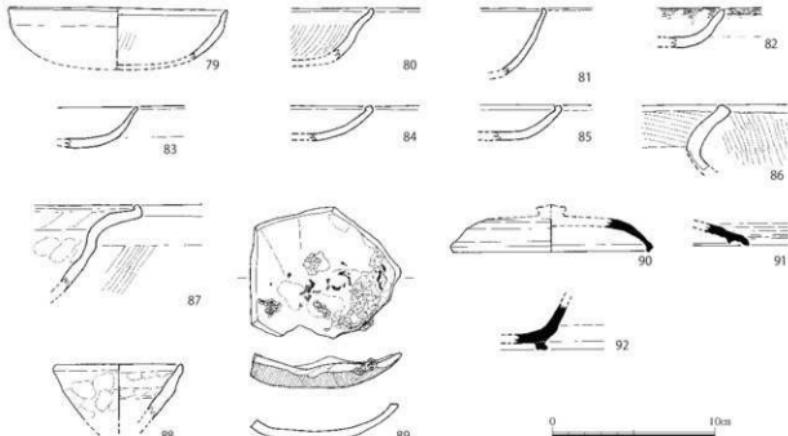


図 18 SD020 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

土師器皿 (82 ~ 85) 82は皿Cである。内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部内外面に煤が付着する。83 ~ 85は皿Aである。83は口縁部にヨコナデ調整、外底面にヘラケズリ調整を施す。84・85は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。

土師器甕 (86) 口縁部は外面に縦方向のハケメ調整、内面に横方向のハケメ調整を施す。口縁端部はヨコナデ調整する。

土師器鍋 (87) 体部は外面に縦方向のハケメ調整、内面にナデ調整、口縁部は内外面にヨコナデ調整を施す。口縁体部は横方向のヘラケズリ後ナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。

土師器製塙土器 (88) 内外面ともにナデ調整を施し、口縁端部はヨコナデ調整する。内外面ともにユビオサエ痕が残る。

土師器取鍋 (89) 甕の体部を転用して取鍋としている。外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施し、高熱のためか色調は灰色を呈する。内面及び断面には付着物がみられる。

須恵器蓋 (90・91) 90・91は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。90は内面には降灰がみられる。91は内面にかえりを持つ。

須恵器杯 (92) 杯Bである。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部外面は回転ヘラキリ後未調整である。

軒平瓦 (93 ~ 95) 重弧文軒平瓦である。瓦当は型挽きによる施文で、顎貼り付けで成形する。凸面にナデ調整を施す。いずれも顎部である。

丸瓦 (96 ~ 99) 96・97は玉縁丸瓦である。96は凸面に繩タタキ後ナデ調整を施す。玉縁凸面にはナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕が残る。97は凸面に斜格子タタキ後ナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕が残る。98は行基丸瓦である。凸面に繩タタキ後ナデ調整、凹面の側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。99は玉縁付近の丸瓦部分である。凸面にナデ調整を施し、凹面の側縁に面取りを行なうが、凹面側にさらに粘土板が付加されることによりこの面取りは見えない。凹面は無調整で布目痕が残り、斜格子状の線刻がなされる。

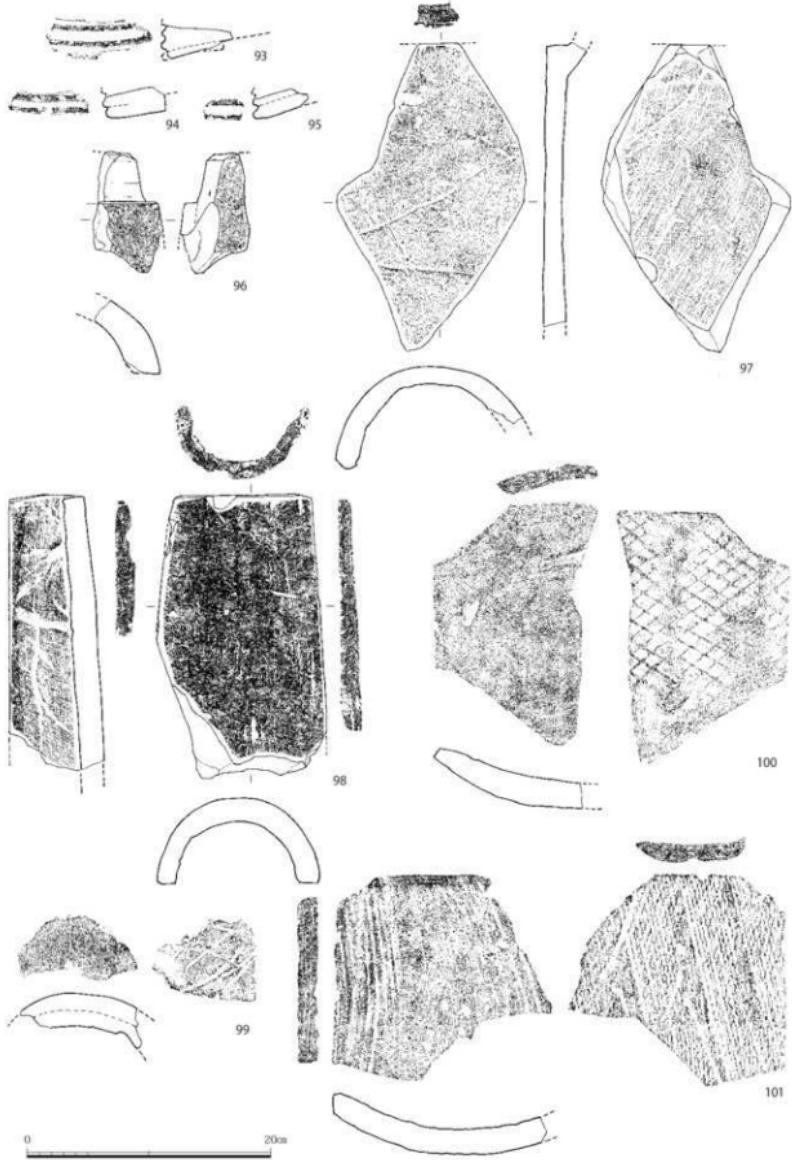


図19 SD020出土遺物実測図(2)(S=1/4)

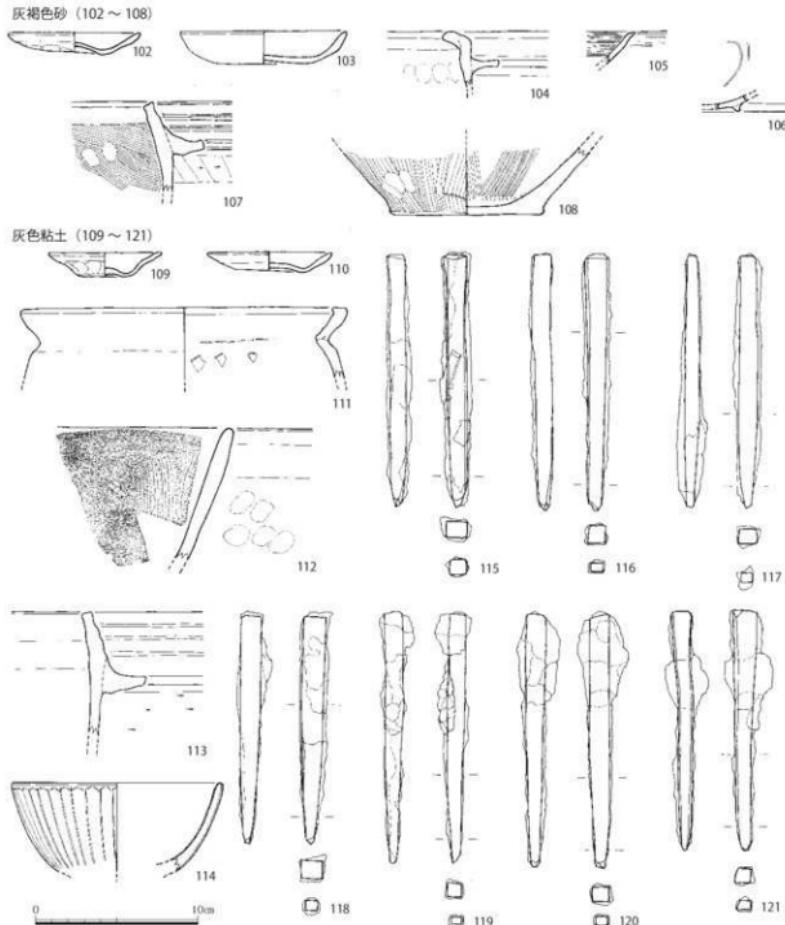


図20 SD030 出土遺物実測図 (S=1/3)

平瓦 (100・101) 100は凸面に斜格子タタキ、凹面にナデ調整を施す。凹面に布目痕、模骨痕が残る。101は凸面に縄タタキ、凹面の縁辺部にナデ調整を施し、凹面各縁に面取りを行う。凹面には布目痕、糸切痕が残る。

SD030 出土遺物 (図20、図版16・17)

灰褐色砂

土師器皿 (102・103) 102は外底面にナデ調整、内底面及び口縁部にヨコナデ調整を施す。口縁部外面にはユビオサワ痕が残る。103は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。胎土には3mm程度

の砂粒を多く含む。

土師器釜（104） 大和H型である。体部は内面にナデ調整を施す。外面には鈎の貼り付けに伴いヨコナデ調整が施される。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整する。

瓦器椀（105・106） 105は大和型瓦器椀である。外面にナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。口縁部内面には沈線がめぐり、内面には横方向のヘラミガキ調整を施す。106は外面にナデ調整を施す。内面見込み部には連結輪状暗文を施す。

瓦質土器釜（107） 体部は内面に斜めから横方向のハケメ調整、外面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。内面にはユビオサエ痕が残る。

瓦質土器擂鉢（108） 外面に縱方向のハケメ調整を施し、底部付近体部外面にはユビオサエ痕が残る。内面には9条一単位の擂目を施す。

灰色粘土

土師器皿（109・110） 外底面にナデ調整、内底面及び口縁部にヨコナデ調整を施す。109は口縁部外面にユビオサエ痕が残る。

土師器釜（111） 大和I型である。内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、口縁端部はヨコナデ調整をする。体部内面には工具の当たり痕が残る。

瓦質土器擂鉢（112） C型式である。体部は外面にナデ調整、内面には5条一単位の擂目を施す。体部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。

瓦質土器釜（113） 体部は内面にヨコナデ調整、外面に横方向のヘラケズリ調整を施す。口縁部はヨコナデ調整する。

青磁椀（114） 外面に細蓮弁を描く。胎土は灰色を呈する。龍泉窯産である。

鉄製品釘（115～121） いずれも断面形態は方形を呈する。頭部についてははっきりとしないが、先細りの形態をとる。

SK035 出土遺物（図21・22、図版17・18）

褐色砂

土師器杯（122・123） 122は外面に横方向のヘラミガキ調整、内面は下半に正放射状暗文、上半に斜放射状暗文を施す。123は杯Aである。口縁部上半は表面劣化のため調整不明だが、外面に横方向のヘラケズリ調整、内面に正放射状暗文を施す。

須恵器杯（124） 口縁部外面及び内面に回転ナデ調整、外底面に回転ヘラケズリ調整を施す。

炭化物層

土師器杯（125・127・128） 125は杯Aである。外底面にヘラケズリ調整、口縁部外面に横方向のヘラミガキ調整を施す。内面は口縁部に正放射状暗文、見込みにラセン状暗文を施す。外底面に「宮」の墨書がある。127は外面に横方向のヘラミガキ調整、内面は下半に正放射状暗文、上半に斜放射状暗文を施す。128は口縁部上半は表面劣化のため調整不明だが、外面に横方向のヘラケズリ調整、内面に正放射状暗文を施す。

土師器甕（126・129） 126は体部片である。外面に縱方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。内面にはユビオサエ痕が残る。外面に朱墨による墨書があるが、判読できない。

土師器取鍋（129） 甕の体部を転用して取鍋としている。外面にハケメ調整を施す。内面は付着物のため調整不明である。高熱のためか色調は灰色を呈する。内面及び断面には鉛滓などの付着物がみられる。

褐色砂（122～124）



炭化物層（125～134）

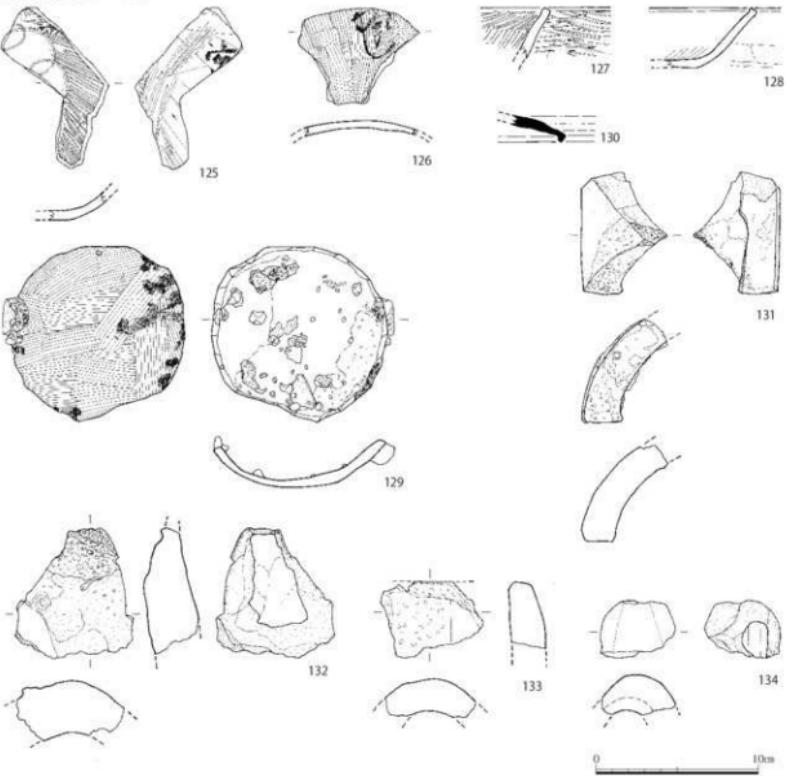


図21 SK035出土遺物実測図(1)(S=1/3)

須恵器蓋（130） 内外面ともに回転ナデ調整を施す。内面の一部が平滑となっており、硯に転用された可能性がある。

丸瓦転用不明土製品（131） 凸面にナデ調整を施し、凸面側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。凹凸両面及び破面に取鍋や羽口などにみられるものと同様の付着物がみられる。この付着物は側面には及ばないことから、側面を下に据えた状態で使用されたものと考えられる。

土製品羽口（132～134） 内外面ともにナデ調整を施す。胎土は粗く、3mm程度の砂粒を多く含む。132は外面に付着物がみられる。

炭化物層

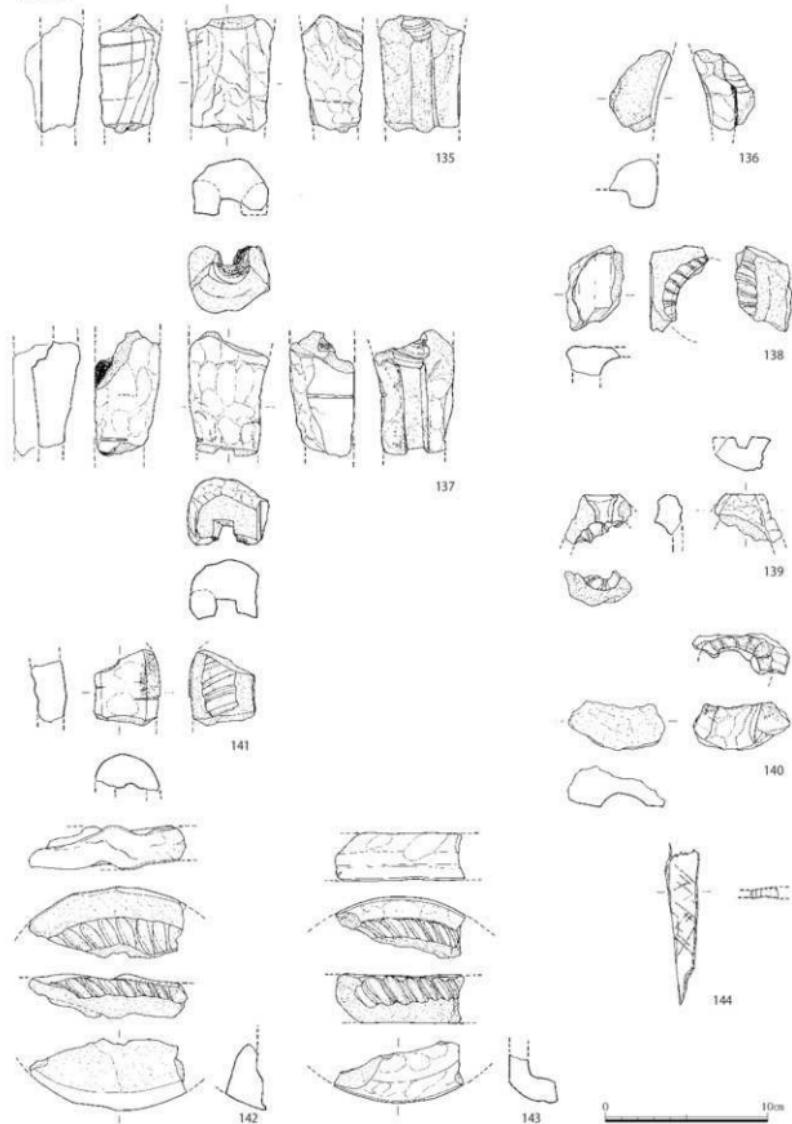


図 22 SK035 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

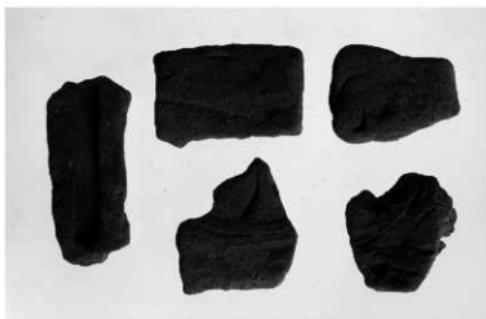


写真1 1993年度樞原市教育委員会調査区出土 土製鋳型（樞原市教育委員会蔵）

土製品鋳型（135～143） 135～137は断面方形の柄の先端に、柄とは軸を異にする溝状の凹みで装飾された球が取り付く製品の鋳型である。橙色を呈するが、鋳型面は使用時の高熱により灰色を呈する。135・137の側面には鋳型を合わせる際の目印としたと考えられる線刻がみられる。138～140は直径5cm程度に復元できる花弁状の製品の鋳型であるが、中心部を欠損する。花弁の表現は正放射状である。橙色を呈するが、鋳型面は使用時の高熱により灰色を呈する。139・140は湯口の可能性が考えられる溝状の凹みを持つが、鋳型面のように灰色を呈していないため疑問が残る。141～143は直径13cm程度に復元できる花弁状の製品の鋳型であるが、中心部を欠損する。花弁の表現は正放射状とならず斜めになっている。橙色を呈するが、鋳型面は使用時の高熱により灰色を呈する。142は型合わせのためか端部が上方に突出している。135～137と同様のものは、隣接する1993年度に樞原市教育委員会が調査を行った調査区からも出土している（写真1左端）。
不明木製品（144） 桿目取りによる板状の製品である。表面に格子状の線刻がなされる。

SX025 出土遺物（図23、図版18・19）

土師器杯（145） 杯Gである。口縁部外面及び内面にヨコナデ調整、底部外面にナデ調整を施す。

土師器皿（146） いわゆる「て」字状口縁を持つものである。口縁部外面及び内面にヨコナデ調整、底部外面にナデ調整を施す。

土師器釜（147） 外面にヨコナデ調整、内面にナデ調整を施し、内面にはユビオサエ痕が残る。外面上には煤が付着する。

黒色土器椀（148） A類椀である。内面は表面劣化のため調整不明だが、外面にナデ調整を施す。口縁端部には沈線がめぐる。

瓦器椀（149） 外面にナデ調整、内面体部に横方向のヘラミガキ調整を施す。内面見込み部には連結輪状暗文を施す。

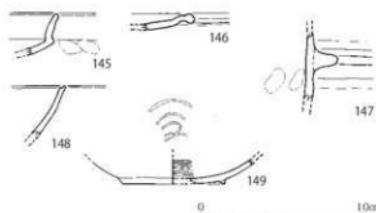


図23 SX025 出土遺物実測図（S=1/3）

素掘小溝出土遺物 (図 24、図版 19)

土師器椀 (150～152) 150は体部外面にナデ調整後縦方向のヘラケズリ調整、体部内面にナデ調整を施し、口縁部はヨコナデ調整する。151は体部外面とともにナデ調整を施し、外面にはユビオサエ痕が残る。口縁部はヨコナデ調整する。152は体部外面にナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。体部内面及び口縁部にはヨコナデ調整する。

土師器皿 (153) 体部外面にナデ調整、体部内面及び口縁部にヨコナデ調整を施す。

瓦器椀 (154) 大和型瓦器椀である。外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面には横方向のヘラミガキ調整を施す。

炉壁 (155) 胎土には5mm程度の砂粒を多く含み、非常にもりい。一部は黒色に変色している。

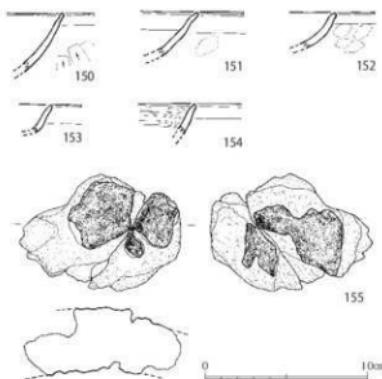


図 25 素掘小溝出土遺物実測図 (S=1/3)

第3節 第2遺構面の遺構と遺物

第1項 検出遺構

溝

S0018 (図 25、図版 4)

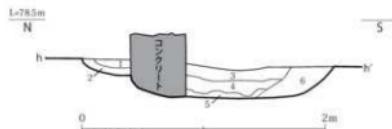
調査区北寄りで検出した東西方向の溝である。幅2.6m、深さ0.2mで、断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は褐灰色細砂の地山ブロックを主体とする。流水の痕跡はなく、人為的に埋め戻したものであると考えられる。また、堆積の途中に土壤化した層が存在することから、埋め戻しは一度に行われたものではなく、開口状態にあった時期が想定できる。

出土遺物から古墳時代後期に埋没したと考えられる。

落ち込み

SX040 (図 26、図版 4・5)

調査区中央から南半にかけて検出した谷地形に伴う落ち込みで、調査区外へと続く。調査時の安全を



1. 褐灰7.5YR5/1 粗砂混細砂（径100mmの地山ブロックを含む）
2. 褐灰10YR6/1 粗砂混細砂（地山ブロックを主体とする）
3. 褐灰10YR6/1 粗砂混細砂（炭化物、土塊片を少量含む。地山ブロックを主体とする）
4. 褐白10YR7/1 粗砂混シルト（土壤化層になる）
5. 褐白10YR7/1 粗砂混細砂（地山ブロックを主体とする）
6. 褐鐵10YR6/1 粗砂混細砂（地山ブロックを主体とする）

図 24 SD018 土層断面図 (S=1/40)

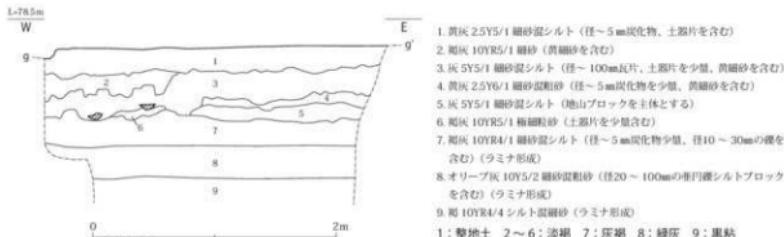


図 26 SX040 土層断面図 (S=1/40)

確保するために完掘には至らなかったが、検出面から深さ約70cmまでは掘削を行った。埋土は上層から、淡褐色砂、灰色粘土、緑灰色砂、黒色粘土であり、このうちの淡褐色砂は整地土と一連のものであると考えられる。また、北肩付近にのみ緑灰色砂の上面に褐色砂の堆積がみられる。灰色粘土、緑灰色砂、黒色粘土にはラミナの形成がみられることから自然堆積と考えられる。

出土遺物から古墳時代中期から7世紀にかけて自然堆積による埋没が進行し、7世紀後半に人為的に埋め戻されたと考えられる。

第2項 出土遺物

SD018 出土遺物 (図27、図版19)

土師器壺 (156) 壺底部である。内外面ともに表面劣化のため調整不明である。

土師器高杯 (157・158) 157は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。脚柱部内面には刺突具の痕跡がみられる。158は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面はヨコナデ調整を施し、刺突具の痕跡がみられる。

SX040 出土遺物 (図28～33、図版19～24)

淡灰色砂

土師器杯 (159) 杯Bである。内外面ともに表面劣化のため調整不明の部分が多いが、外面に横方向のヘラミガキ調整、内面下半に放射状暗文を施す。

土師器皿 (160) 体部外面にナデ調整、体部内面及び口縁部にヨコナデ調整を施す。口縁部内面には煤が付着する。

土師器壺 (161) 内外面ともにヨコナデ調整を施す。外面にはユビオサエ痕が残る。

須恵器蓋 (162～165) 162は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面には宝珠状のツマミを貼り付ける。天井部内面は平滑になっており、硯に転用された可能性がある。163は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。外面には重ね焼きの痕跡が残る。164・165はいずれも内外面ともに回転ナデ調整を施す。

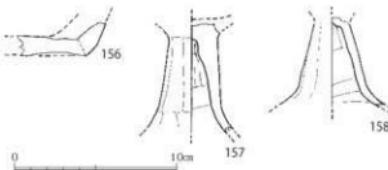


図 27 SD018 出土遺物実測図 (S=1/3)

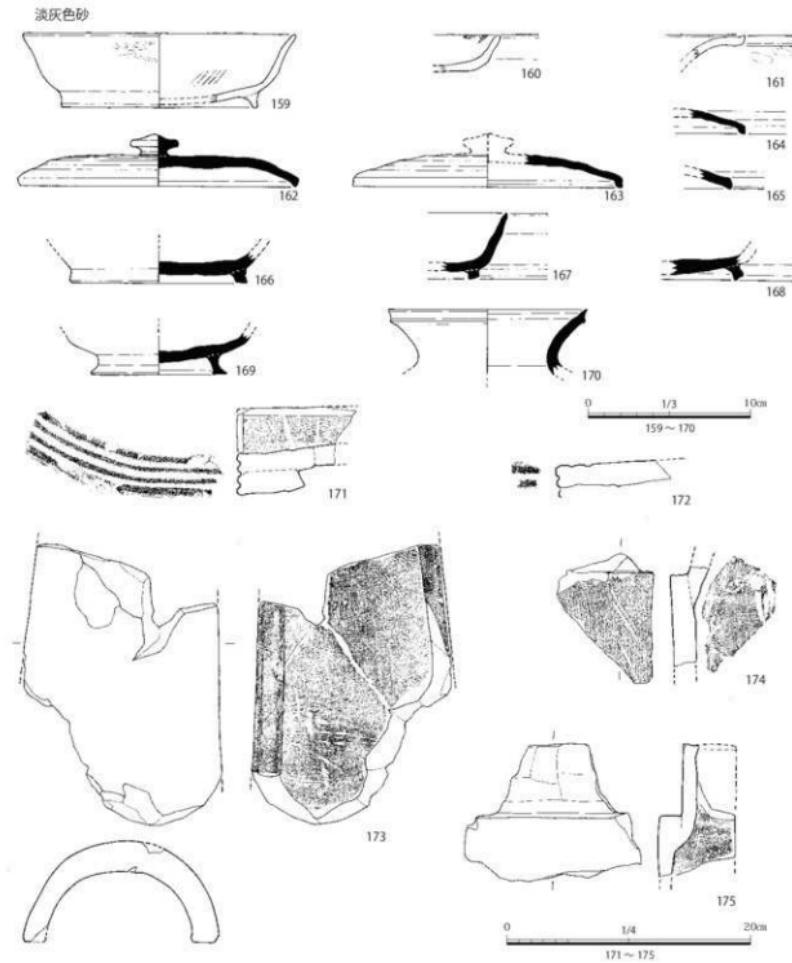


図28 SX040 出土遺物実測図 (1) (S=1/3・1/4)

須恵器杯（166～168） いずれも杯Bである。166は内外面ともに回転ナデ調整を施す。167は口縁部及び底部内面に回転ナデ調整、底部外面に回転ヘラケズリ調整後回転ナデ調整を施す。168は底部内面に不定方向のナデ調整、底部外面に回転ヘラケズリ調整後回転ナデ調整を施す。

須恵器壺（169・170） 169は外面に回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整及び不定方向のナデ調整を施す。170は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

淡灰色砂

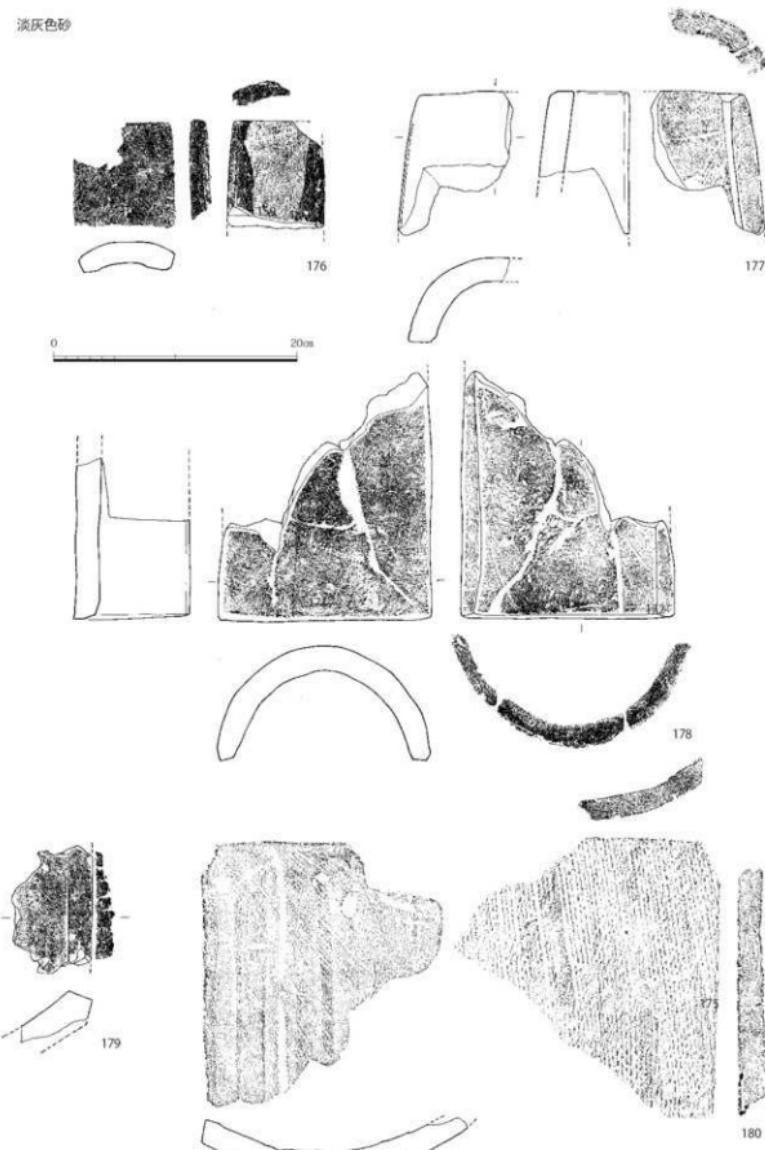


図29 SX040 出土遺物実測図（2）（S=1/4）

軒平瓦(171・172) 171は四重弧文軒平瓦である。瓦当は型挽きによる施文で、顎貼り付けで成形する。凹面にはナデ調整を施し、布目痕、模骨痕が残る。172は重弧文軒平瓦の平瓦部である。凹面にはナデ調整を施し、布目痕が残る。

丸瓦(173～178) 173は行基丸瓦である。凸面に斜格子タタキ後ナデ調整を施し、凹凸両面の側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。174・175は玉縁丸瓦である。凸面は丸瓦部分には繩タタキ後ナデ調整、玉縁部にはナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕が残る。176は玉縁丸瓦の玉縁部である。凸面にナデ調整を施し、凸面側縁片側にのみ面取りを行う。凹面は側縁部にヘラケズリ調整を施し、布目痕が残る。177は行基丸瓦である。凹凸両面ともに表面劣化のため調整不明であるが、凹面側縁に面取りを行う。凸面には分割裁線が残る。178は凸面に繩タタキ後ナデ調整、凹面は側縁にヘラケズリ調整を施す。凸面側縁に面取りを行う。

平瓦(179・180) 179は凸面は剥離のため調整不明、凹面は側縁部にナデ調整を施す。凹面には布目痕が残る。側面は凹凸両面から面取りを行い、断面剣先状となる。180は凸面に繩タタキ、凹面各辺にナデ調整を施す。凹面には布目痕、模骨痕、糸切痕が残る。

灰色粘土

土師器鉢(181) 底部外面はナデ調整、体部は下半に横方向のヘラケズリ調整後横方向のヘラミガキ調整を施す。内面は見込みにラセン状暗文、口縁部下半に正放射状暗文、口縁部上半に斜放射状暗文を施す。

土師器皿(182) 底部内外面にナデ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。底部内面には煤が付着する。

土師器鍋(183) 体部は外面に縦方向のハケメ調整、内面に横方向のハケメ調整、口縁部にヨコナデ調整を施し、体部内面の把手貼付部に当たる位置にユビオサエ痕が残る。把手にはユビオサエ痕が残り、体部への貼り付け後縦方向のハケメ調整を施す。

土師器高杯(184～186) 184は杯部内面は表面劣化のため調整不明であるが、外面に縦方向のヘラケズリ調整後、脚柱部に縦方向のヘラミガキ調整を施す。脚柱部内面にはナデ調整を施す。185は内外面ともにヨコナデ調整後、内面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。内外面ともに黒斑が観察できる。186は脚裾部内外面にヨコナデ調整、脚柱部は外面に縦方向のヘラミガキ調整、内面に横方向のヘラケズリ調整、杯部は底部内外面にナデ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。

須恵器蓋(187・188) いずれも内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

須恵器杯(189) 底部は外面に回転ヘラキリ後ナデ調整、内面に不定方向のナデ調整を施す。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

丸瓦(190～192) 190は行基丸瓦である。凸面に繩タタキ後ナデ調整、凹面各辺にヘラケズリ調整を施し、凹面には布目痕が残る。191は凸面に繩タタキ後ナデ調整を施し、凹面側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。192は凸面にナデ調整、凹面各辺にヘラケズリ調整を施す。凹面には布目痕、糸切痕が残る。

平瓦(193～198) 193は凸面に繩タタキ、凹面各辺にヘラケズリ調整を施す。凹面には布目痕、模骨痕が残る。194は凸面に繩タタキ、凹面各辺などにナデ調整を施す。凹面には布目痕が残る。195は凸面に繩タタキ後部分的なナデ調整を施し、凹面の縁辺部に面取りを行う。凸面には糸切痕、凹面には布目痕が残る。側面角および凹凸両面の中心部が平滑になっており、磨り潰す道具に転用された可能性がある。196は凸面に繩タタキ、凹面各辺にナデ調整を施す。内面には布目痕、模骨痕が残る。197

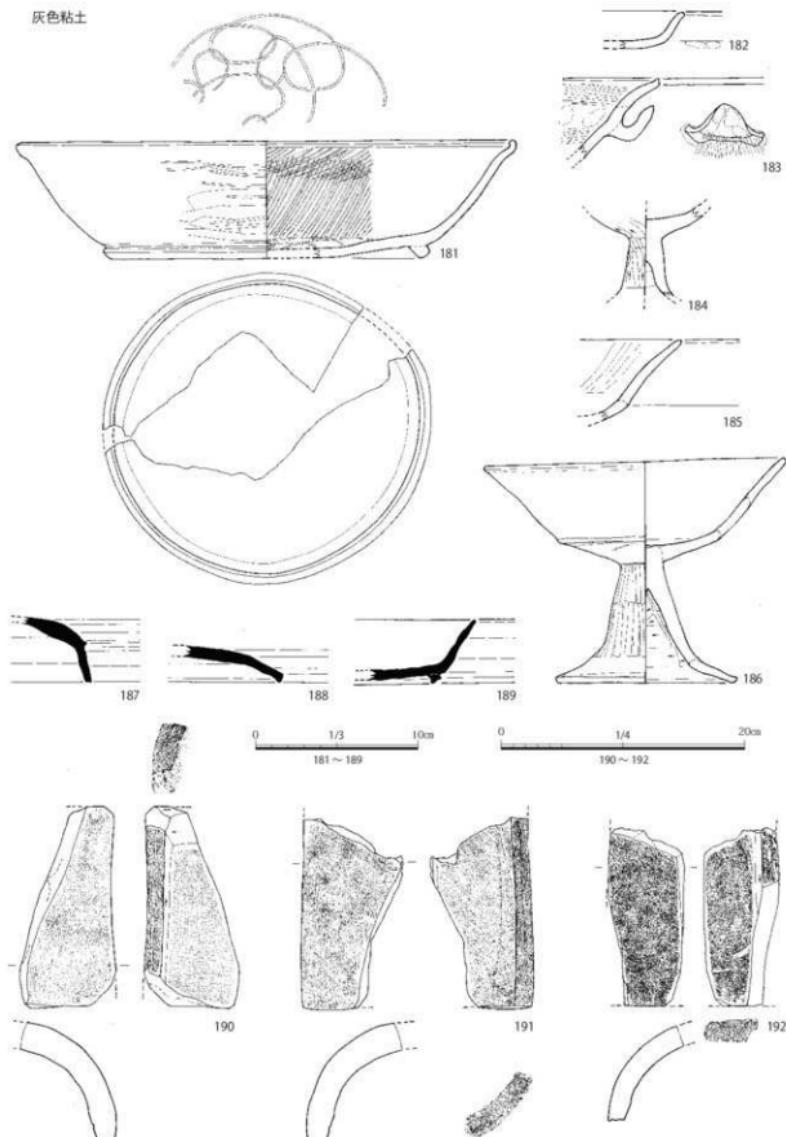
図 30 SX040 出土遺物実測図 (3) ($S=1/3 \cdot 1/4$)



図 31 SX040 出土遺物実測図 (4) (S=1/4)

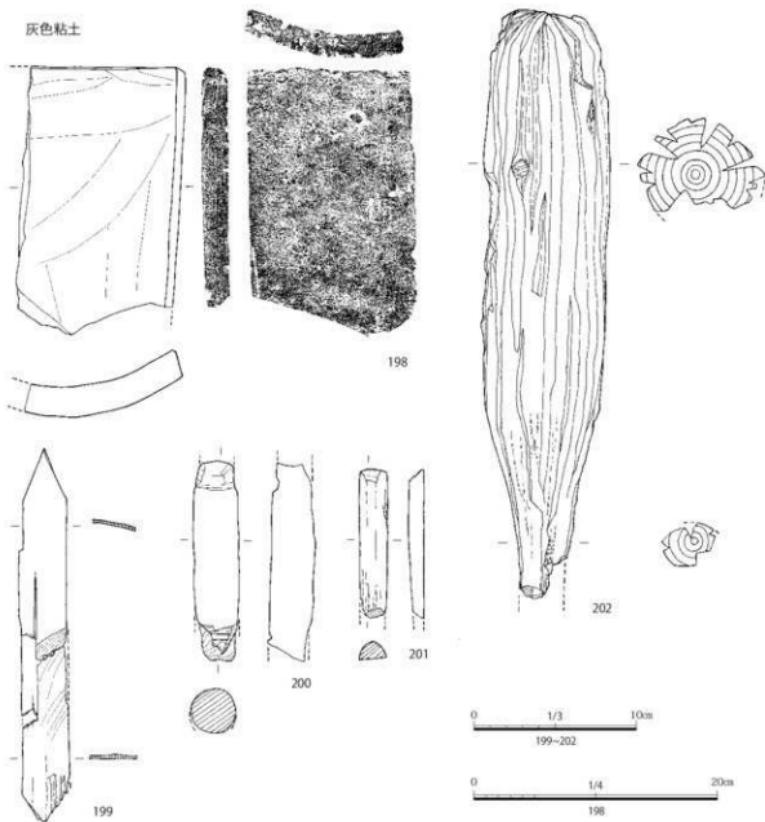


図32 SX040出土遺物実測図(5)(S=1/3・1/4)

は凸面に平行タタキ後ナデ調整、凹面にナデ調整を施す。凹面には布目痕が残る。198は凸面に平行タタキ後ナデ調節、凹面にナデ調節を施す。凹面側縁に面取りを行う。

木製品斎串(199) 柄目取りによる板状の製品である。上下端を斜めに切り出し、中心付近には2つの小孔が穿たれる。

不明棒状木製品(200・201) 200は断面円形を呈する。表面は半分ほどが遺存していない。溝状の凹みが2カ所あり、全周していた可能性がある。201は断面半円形を呈するが、本来は断面円形である可能性がある。端部を斜めに切り出している。

木製品堅杵(202) 心持材である。表面劣化のため調整不明だが、端部には使用によるものと考えられる磨り減りがみられる。

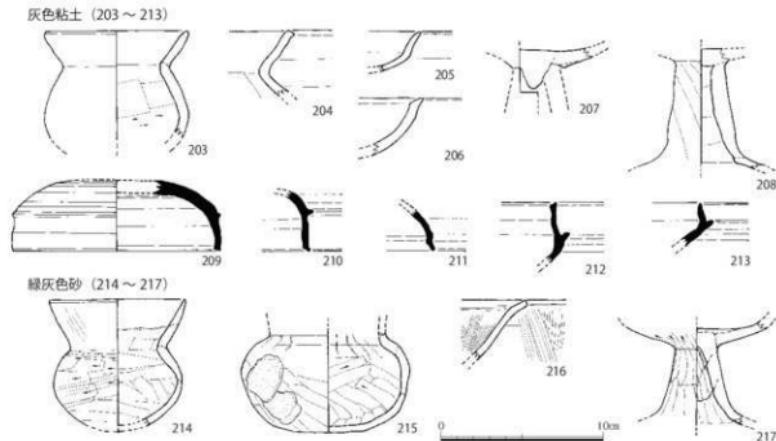


図 33 SX040 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)

褐色砂

土師器壺 (203) 外面は表面劣化のため調整不明であるが、体部内面に横方向のヘラケズリ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。外面には黒斑が観察できる。

土師器甕 (204) 体部外縁および口縁部にナデ調整、体部内面にナデ調整を施す。口縁部外面には煤が付着する。

土師器杯 (205・206) 205 は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。206 は体部は表面劣化のため調整不明であるが、口縁部にはヨコナデ調整を施す。

土師器高杯 (207・208) 207 は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。脚部から杯部にかけて成形した後、杯底部に三角錐状の粘土塊を充填したものと考えられる。208 は脚柱部内外面にナデ調整、杯部底面にナデ調整を施す。脚部と杯部を分割して成形後、接合したものと考えられる。

須恵器蓋 (209 ~ 211) 209・210 は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。211 は内外面ともに回転ナデ調整を施す。

須恵器杯 (212・213) 内外面ともに回転ナデ調整後、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。

緑灰色砂

土師器壺 (214・215) 214 は体部外縁に横方向のヘラケズリ調整後、上端にヘラミガキ調整、体部内面にナデ調整を施す。口縁部は外面に縦方向のハケメ調整後ナデ調整、内面にナデ調整を施す。外面には黒斑、口縁部内面には接合痕が観察できる。215 は弱く平底を有し、内外面ともにナデ調整を施す。内外面に黒斑が観察できる。

土師器鉢 (216) 体部は内外面ともに縦方向のハケメ調整、口縁部はヨコナデ調整を施す。

土師器高杯 (217) 脚柱部は外面にヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施し、内面にはシボリ痕が残る。杯部は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施す。脚柱部内面には黒斑が観察できる。

第4節 表土出土遺物

表土出土遺物（図34、図版24）

土師器高杯（218） 脚柱部は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施し、内面にはシリ痕が残る。杯部は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。

須恵器杯（219） 内外面ともに回転ナデ調整後、外底面に回転ヘラケズリ調整、内底面に一方向のナデ調整を施す。

軒平瓦（220） 宝珠唐草文軒平瓦である。凹面に縦棧がつく、いわゆる掛け瓦である。瓦当は顎貼り付けで成形する。平瓦部は凸凹両面ともにナデ調整を施す。同文例は奈良市薬師寺などにみられる。

丸瓦（221） 凸面に平行タタキ後ナデ調整、凹面縁辺部にヘラケズリ調整を施す。凹面の片側の縁辺部に面取りを行う。凹面には布目痕が残る。

平瓦（222・223） 222は隅切瓦である。凸面に網タタキ、凹面縁辺部にナデ調整を施す。凹面には布目痕、模骨痕が残る。223は凸面に斜格子タタキ、凹面にナデ調整後、縁辺部にヘラケズリ調整を施す。

丸瓦転用不明土製品（224） 凸面にナデ調整を施す。凹面は無調整で布目痕が残る。凹凸両面に取綱や羽口などにみられるものと同様の付着物がみられる。

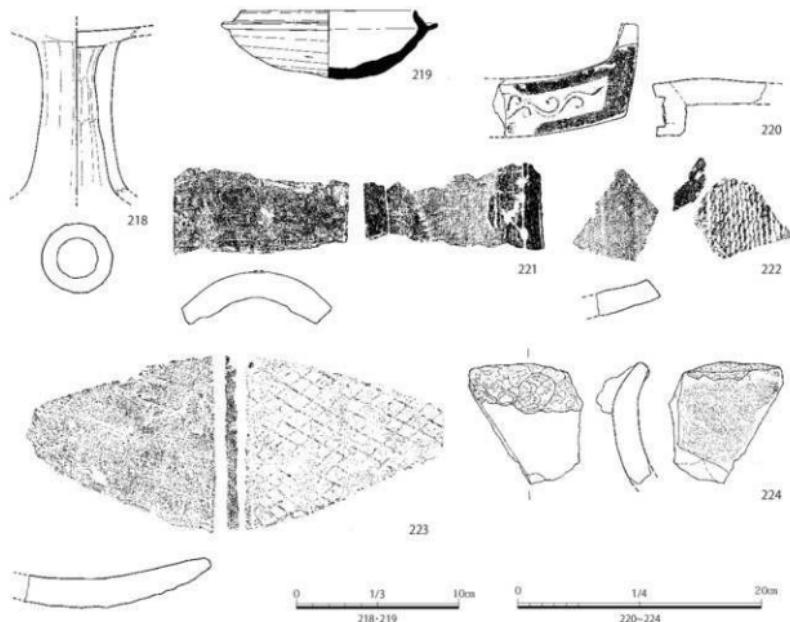


図34 表土出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

第4章 自然科学分析

1. はじめに

藤原京右京十二条三坊・石川廢寺で検出されたSKO35からは、多量の炭化物などとともに、金属製品生産に関わる可能性がある鉱滓が出土した。出土した鉱滓を分析することによりどのような金属製品生産が行われていたかを明らかにするために、X線透過撮影、及び蛍光X線分析による元素マッピングを行った。

2. 分析対象

鉱滓 26点 (No. 1-26 (図35))



図35 鉱滓

3. 分析内容及び使用機器

X線透過撮影

X線透過撮影はX線の透過率が元素によって異なるという性質を利用し、対象物の内部構造などを非破壊的に調べる方法である。

本分析では、X線発生装置 MG225(Philips)、イメージングプレート工業用 UR-1型(富士フィルム)、画像読込装置 AC-7HR(富士フィルム)を用い、管電圧 140kV、管電流 2mA、照射時間 1min の条件下撮影を行った。

元素マッピング

蛍光X線分析は試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光X線を検出することにより、試料の構成元素を同定する分析方法である。元素マッピングでは、試料表面を微小領域に分割し、各微小領域において蛍光X線分析を行うことで試料表面の元素分布を調べる。

本分析では蛍光X線分析装置 EA6000VX(株式会社日立ハイテクサイエンス)を用い、大気中においてコリメータ $0.2 \times 0.2\text{mm}$ 、管電圧 50kV、管電流 1mA、測定時間 20msec/point の条件で分析を行った。なお、X線ターゲットはロジウム(Rh)である。

4. 結果と考察

X線透過撮影

X線透過撮影の結果を図36に示す。No. 9, 14, 22-26以外の資料において、X線を遮蔽する粒状の影が観察された。No. 22-26は体積当たりのX線遮蔽率が高く、重い元素を多く含んでいると考えら

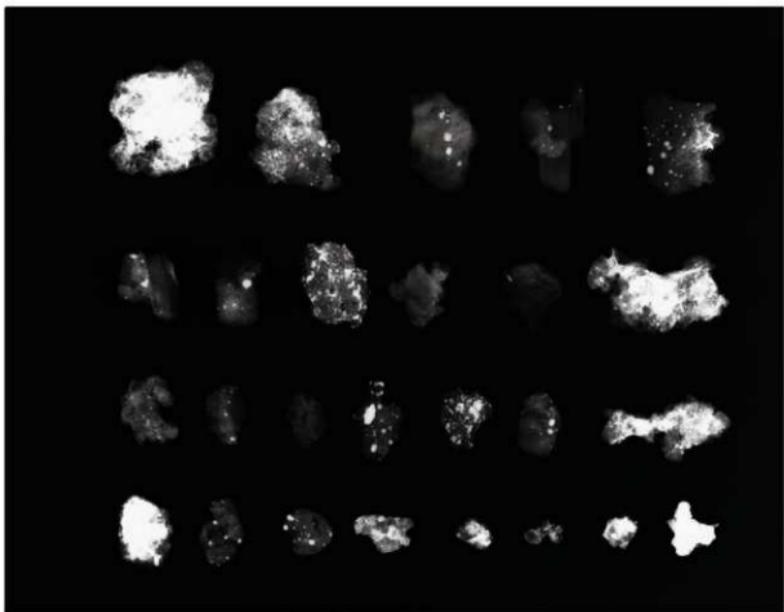


図36 X線透過撮影像

(1段目左から No. 1-5、2段目左から No. 6-11、3段目左から 12-18、4段目左から No. 19-26)

れた。

元素マッピング

分析は資料の大きさを鑑み、3つのグループに分けて行った（グループ1：No. 1, 2, 3, 4, 11, 18, 19、グループ2：No. 5, 6, 7, 8, 9, 16, 17, 21、グループ3：No. 10, 12, 13, 14, 15, 20, 22, 23, 24, 25, 26）。各グループの鉄(Fe)、銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)の測定結果を図37～39に示す。全ての鉱滓から鉄、及び銅が検出された。No. 12からはスズ、No. 19, 23からは鉛が他の資料より強く検出された。

以上の観測結果より、資料は銅滓と考えられた。X線透過撮影において粒状の影が見られた箇所からは銅を強く検出した。ただし、No. 3では鉄及び銅を強く検出した。また、No. 22～26は銅を強く検出し、他の資料より銅の割合が高い滓であると考えられた。

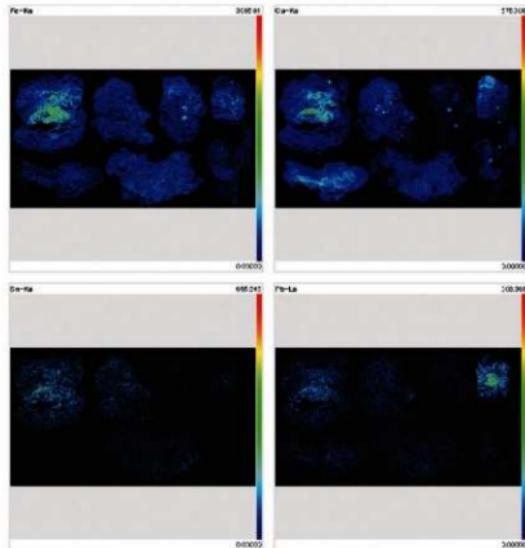


図37 グループ1の元素マップ

(左上：鉄、右上：銅、左下：スズ、右下：鉛、上段左からNo. 1, 2, 3, 19、下段左からNo. 18, 11, 4)

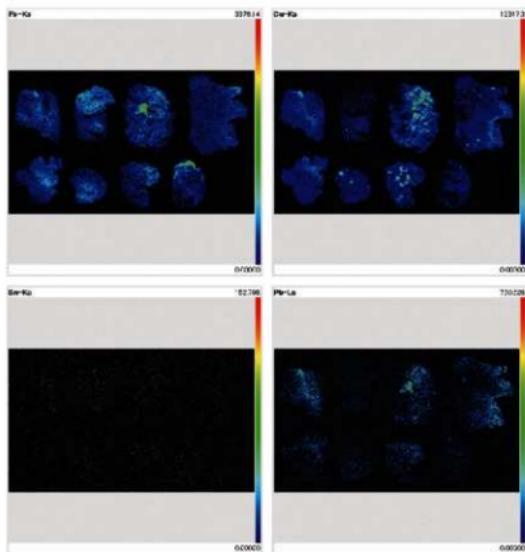


図38 グループ2の元素マップ

(左上：鉄、右上：銅、左下：スズ、右下：鉛、上段左からNo. 6, 7, 8, 5、下段左からNo. 9, 21, 16, 17)

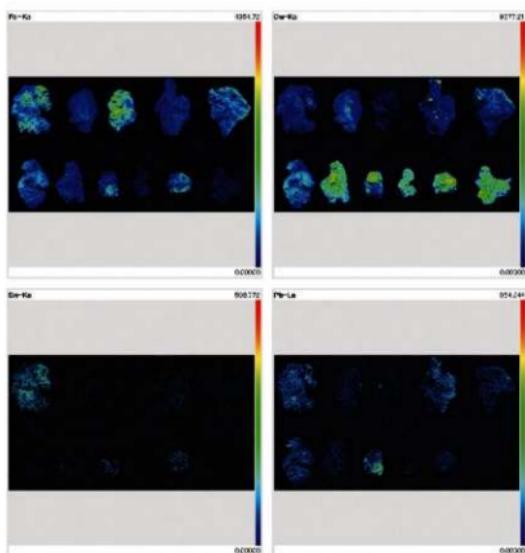


図39 グループ3の元素マップ

(左上：鉄、右上：銅、左下：スズ、右下：鉛、上段左からNo. 12, 13, 14, 15, 10、下段左からNo. 20, 22, 23, 24, 25, 26)

第5章 調査のまとめ

第1節 遺構の変遷について

0期（藤原京期以前）

SX040下層で確認されたように谷地形が広がっていたものと考えられる。古墳時代には堆積が進んでおり、SD018にみられるような土地利用も行われていた。

1期（藤原京期）

SX040上層を含め、藤原京造営に伴うものと考えられる整地が行われる。この整地は周辺の調査でも確認されており、大規模に行われていたことがうかがえる。整地土には白鳳時代の瓦が大量に含まれることから、整地以前に近傍に寺院が存在していたことが分かる。

この整地土上面で検出された遺構のうち、藤原京期に属するものはSK035のみである。炭化物や鉄滓・銅滓などの鉱滓とともに、土製鋳型が出土しており、金属製品生産に関わる廃棄土坑と考えられる。橿原市教育委員会による1993年度の調査でこの東半が検出され、さらに東側にも同様の土坑が確認されている⁽³¹⁾。寺院の造営に関わるものとすれば、藤原京造営にあたって、寺域の変更はあったかもしれないが、藤原京遷都後も寺院が存続したものと考えることが出来る。

2期（奈良時代）

SD015・020が該当する。藤原京から平城京への遷都後も、調査地周辺が利用されていたことが分かるが、8世紀半ばにはこれらも廃絶する。

3期（14～15世紀）

南北溝SD010は調査区南半で東西方向の溝となる。橿原市教育委員会による1993年度の調査の南半で確認された溝群などと関係するものと考えられ、これらが一体となって複数の方形区画を形成していると考えられる。

調査区南側で検出した落ち込みについては、整地上およびその下層にある自然堆積土の沈み込みに堆積したものと考えられ、人為的なものではないと考える。

第2節 瓦の組成について

今回の発掘調査では遺構・時代を問わず多くの遺構から、石川廃寺に関わると考えられる白鳳時代の瓦が多く出土した。ここでは大枠として、平瓦および丸瓦の凸面の調整によって分類した組成を提示する（表1）。なお、ナデ調整としたものは、ナデ調整の前段階にはいずれかのタタキによる調整がなされたと考えられるが、現状では把握が困難であるため、不明と同様の扱いとした。

丸瓦、平瓦ともに縄タタキのものが優勢で、これに格子タタキのものが続く。平行タタキのものは極めて少ない。ここからは、石川廃寺の創建期の瓦が縄タタキの一一群である可能性を示すが、隅切瓦や熨

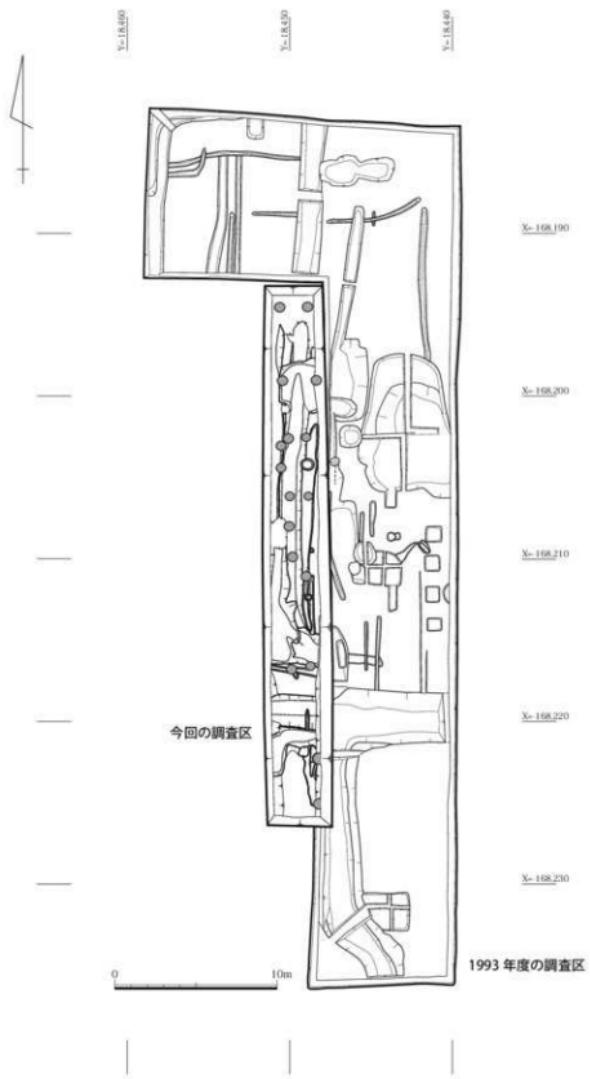


図 40 1993 年度調査との位置関係 (S=1/300)

斗瓦と考えられるものには、格子タタキのものが多くを占めるという点において、若干の課題を残す。今回の調査区の範囲が非常に限られていることもあり、今後の課題としたい。

(註) 未報告の調査だが、権原市教育委員会のご厚意により掲載の許可を得た。記して感謝する。なお、図面の合成にあたって簡略化されたため、任意に調整していることを付記する。

表1 出土瓦集計表

遺構・層	種別	斜格子		繩		平行		その他不明	
		点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)
S-1	丸			1	40	1	110		
	平	1	150	6	850			1	10
S-3	丸							1	60
	平	1	280	1	180	1	70	1	100
S-4	丸							1	80
	平								
S-7	丸							2	100
	平	1	50	1	110				
S-8	丸			1	100				
	平	1	200	1	40			1	20
S-9	丸								
	平	1	110			1	110		
SD010	丸			3	390	1	260	7	570
	平	9	1340	16	2190	2	1210	10	730
SD010暗シルト	丸	5	630	13	1810	4	730	31	3710
	平	33	5020	47	4790	10	2250	62	6840
SD010灰粘	丸	1	150	10	3500	4	780	11	650
	平	37	12220	60	11860	20	5390	18	2260
S-12	丸	1	90	1	220				
	平	1	100					3	200
SX013	丸	1	40					1	90
	平	1	60	2	310			2	190
S-14	丸								
	平	5	450	3	330	1	100	7	610
SD015	丸					3	70	2	300
	平	4	445	2	130			11	570
SD020	丸	1	700	18	3760	2	260	25	3280
	平	41	6350	41	7130	1	100	79	4860
SX025	丸			1	50			3	200
	平	12	1600	3	145			7	400
SD030灰褐砂	丸			3	270			7	650
	平	7	950	6	955			16	1310
SD030灰粘	丸			2	490			4	410
	平	6	610	11	1350	1	255	15	1465
SD030灰褐砂	丸							3	320
	平	2	100					8	660
SK035	丸								
	平							3	760
SK035褐砂	丸			2	450			3	180
	平	1	130					3	445
SK035炭化物層	丸							1	695
	平								
SX040淡褐砂	丸	1	1150	13	2030			15	2090
	平	9	1400	56	9180	3	700	73	2210
SX040灰粘	丸			6	2130			13	1920
	平	3	450	19	3985	10	3590	13	1260
整地土	丸	12	3760	24	3635	5	1060	37	4760
	平	41	6520	86	17030	8	1640	96	9585
表土	丸	1	95	6	1555	3	690	18	1870
	平	19	3510	31	5045	2	100	50	4420

関連資料

図 41 検出遺構配置略図

表 2～8 報告遺物一覧 (1)～(7)

表 9・10 検出遺構および出土遺物一覧 (1)・(2)

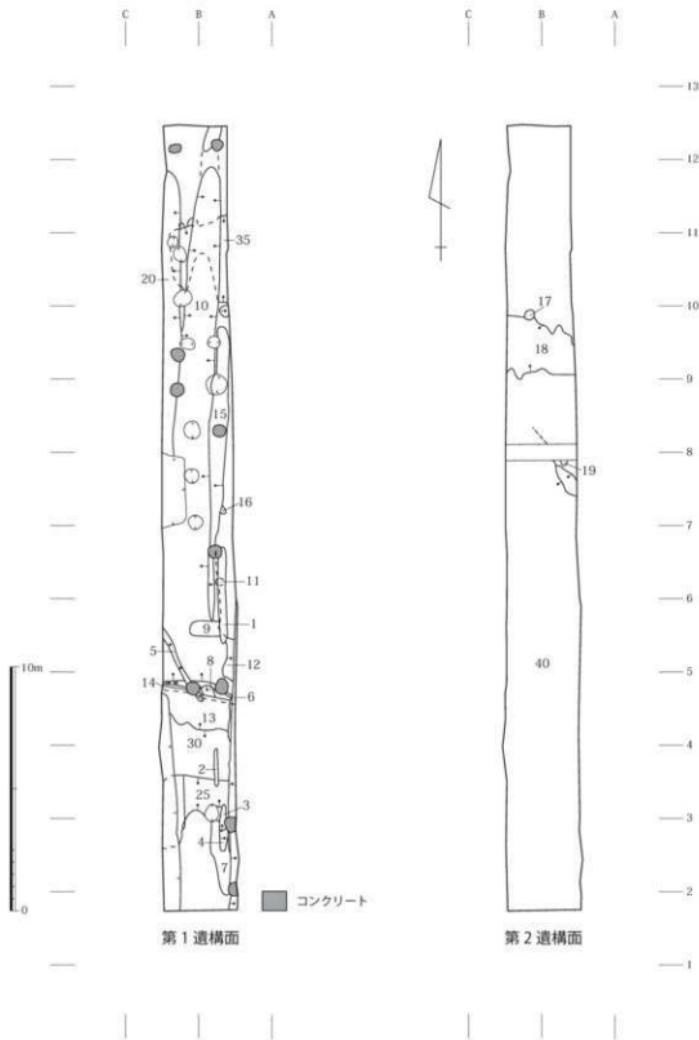


図 41 検出遺構配置略図 (S=1/200)

表2 報告遺物一覧(1)

49

報告No	出土遺構 記番号	種別 器種	口径・高さ・底径(cm) 残存率	地土・素材	焼成・色調	特記事項
岡5-1	墳地土	土師器 杯	* - (3.8) - *	中空粗 口縁部片	不良 ~1mm長石・カサリ鐵	杯A
岡6	墳地土	土師器 杯	* - (1.8) - (13.4)	中空粗 底部分	不良 ~2mm長石・カサリ鐵	杯B
岡5-2	墳地土	土師器 杯	* - (2.5) - *	粗 底部分	不良 ~1mm長石・石英・カサリ鐵	杯A
岡6	墳地土	土師器 皿	(10.6) - (2.3) - *	粗 20%	良 ~3mm石英・長石・金雲母	皿にぶい黄褐色 10YR5/4
岡5-5	墳地土	土師器 移動式壺	(25.0) - (17.4) - *	中空粗 焚口・瓶部片	不良 ~4mm石英・長石・カサリ鐵	粗 7.5YR6/8
岡5-6	墳地土	土師器 皿	(10.3) - 3.0 - *	中空粗 底部分	良 ~4mm石英・長石	皿 N5/0
岡5-7	墳地土	土師器 皿	* - (3.0) - *	中空粗 口縁部片	良 ~2mm長石・カサリ鐵・黒色粒	皿 N6/0
岡5-8	墳地土	土師器 皿	* - (2.0) - *	中空粗 底部分	良 ~1mm長石・黒色泥粒	皿 N7/0
岡5-9	墳地土	土師器 杯	(11.7) - 3.0 - *	粗 30%	良 ~5mm長石・黒色粒	杯A
岡5-10	墳地土	土師器 杯	* - (2.6) - (14.0)	中空粗 底部分	良 ~2mm長石・黒色粒	杯B
岡6	墳地土	土師器 杯	(19.0) - 4.6 - (12.0)	中空粗 20%	良 ~2mm石英・長石・黒色粒	杯N7/0
岡6-12	墳地土	丸	(4.0) - (7.8) - 4.2	中空粗 軒平瓦	良 ~2mm長石・カサリ鐵	軒平瓦 N5/0
岡6-13	墳地土	丸	(5.2) - (8.5) - (2.4)	粗 軒平瓦	良 ~4mm石英・長石	軒平瓦 N6/0
岡6-14	墳地土	丸	(3.8) - (4.7) - (6.1)	中空粗 丸瓦	良 ~1mm石英・長石・カサリ鐵	丸瓦 7.5YR5/4
岡6-15	墳地土	丸	(15.1) - (10.3) - 8.2	粗 丸瓦	良 ~2mm石英・長石	丸瓦 N5/0
岡6-16	墳地土	丸	(38.6) - (18.0) - 10.0	中空粗 丸瓦	良 ~4mm石英・長石	丸瓦 N4/0
岡6-17	墳地土	丸	(21.8) - (7.8) - (7.1)	中空粗 丸瓦	良 ~5mm石英・長石	丸瓦 N5/0
岡7-8	墳地土	丸	(18.1) - (19.7) - (3.6)	中空粗 平瓦	良 ~3mm長石・石英・カサリ鐵	平瓦 N7/0
岡7-9	墳地土	丸	(9.5) - (9.2) - 3.0	中空粗 平瓦	良 ~2mm長石・カサリ鐵	平瓦 N4/0
岡7-20	墳地土	丸	(11.0) - (8.4) - (2.0)	中空粗 昭和砂 平瓦	良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 平瓦
岡7-21	墳地土	丸	(14.5) - (8.1) - 4.4	中空粗 昭和砂 平瓦	良 ~2mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 平瓦
岡7-22	墳地土	丸	(10.9) - (12.4) - (4.2)	中空粗 平瓦	不良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 N3/0
岡7-23	墳地土	丸	(12.5) - (14.7) - (3.9)	中空粗 昭和砂 平瓦	不良 ~5mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 N2/0
岡8-24	墳地土	丸	(20.3) - (15.6) - 4.3	中空粗 昭和砂 平瓦	不良 ~5mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 N3/0
岡8-25	墳地土	丸	(16.3) - (17.3) - 3.0	中空粗 昭和砂 平瓦	良 ~3mm石英・長石	昭和砂 N5/0
岡8-26	墳地土	丸	(27.3) - 27.3 - 7.6	中空粗 昭和砂 平瓦	良 ~3mm長石・石英	昭和砂 N4/0
岡9-27	墳地土	丸	(22.6) - (18.0) - 4.8	粗 平瓦	不良 ~5mm長石・カサリ鐵	平瓦 N8/0
岡9-28	墳地土	丸	(13.3) - (8.6) - 3.0	中空粗 平瓦	良 ~4mm石英・長石	昭和砂 5Y8/1
岡9-29	墳地土	丸	(8.3) - (9.1) - (3.0)	中空粗 平瓦	不良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 N3/0
岡9-30	墳地土	丸	(17.6) - (18.3) - (14.9)	中空粗 平瓦	不良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	昭和砂 10YR7/1
岡10-31	墳地土	埴輪	* - (13.5) - *	粗 朝鮮形埴輪 口縁部片	良 ~4mm長石・石英・カサリ鐵	朝鮮形埴輪 5YR7/8
岡10-32	墳地土	土製品	8.0 - 3.6 - 3.7	粗 不明	良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	土製品 5YR6/6
岡10-33	墳地土	石製品	6.3 - (5.2) - 4.9	粗 149.5g	良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	石製品 60.5g
岡10-34	墳地土	金属製品	6.3 - 1.8 - 1.2	粗 水煙管 or 煙管	良 ~3mm石英・長石・カサリ鐵	金属製品

表3 報告遺物一覧 (2)

報告No 回収No	出土遺構 部位	種別 器種	口径・器高・底径 (cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
岡13-35	SD010	土師器 組	* - (1.4) - *	やや粗 微小砂粒	良 浅黄褐色 10YR8/3	
岡13-36	SD010	土師器 組	7.8 - 1.8 - * 80%	やや粗	良	
岡版10	堀シルト 組			~ 1mm石英・長石・金雲母	にぶい褐色 7.5YR6/3	
岡13-37	SD010	土師器 組	* - (1.5) - *	やや粗	良	
岡版10	堀シルト 組			~ 1mm石英・長石・クサリ鐵・金雲母	橙 5YR6/6	
岡13-38	SD010	土師器 組	* - (1.1) - *	粗	良	
	堀シルト 組			~ 1mm石英・長石・クサリ鐵	橙 2.5YR6/6	
岡13-39	SD010	土師器 組	* - (1.5) - *	やや粗	良	
岡版10	堀シルト 組			~ 1mm石英・長石・クサリ鐵	にぶい褐色 10YR7/4	
岡13-40	SD010	土師器 組	* - (1.7) - *	やや粗	良	
	堀シルト 組			~ 2mm石英・長石・クサリ鐵	橙 5YR7/6	
岡13-41	SD010	土師器 組	* - (6.3) - 9.2	やや粗	良	
岡版10	堀シルト 組		50%	~ 4mm長石・クサリ鐵	浅黄褐色 7.5YR8/4	
岡13-42	SD010	土師器 組	* - (5.2) - *	やや粗	良	
岡版10	堀シルト 組			~ 1mm長石・クサリ鐵	淡橙 5YR8/4	
岡13-43	SD010	土師器 組	(14.4) - (4.0) - *	やや粗	良	火和H型
岡版10	堀シルト 組		10%	~ 1mm石英・長石・クサリ鐵	浅黄褐色 10YR8/3	
岡13-44	SD010	土師器 組	* - (4.5) - *	やや粗	不良	火和H型
	堀シルト 組			~ 1mm石英・長石・クサリ鐵	浅黄褐色 7.5YR8/3	
岡13-45	SD010	土師器 組	(22.6) - (3.8) - *	やや粗	良	火和H型
岡版11	堀シルト 組		10%	~ 1mm長石・クサリ鐵	灰白 10YR8/2	
岡13-46	SD010	丸皿	(8.2) - 3.6 - *	面	良	火和型
	堀シルト 組		40%		灰 N4/0	
岡13-47	SD010	瓦器 組	* - (2.6) - *	面	良	火和型
	堀シルト 組			微小砂粒	灰 N5/0	
岡13-48	SD010	瓦器 組	* - (2.3) - *	面	良	火和型
	堀シルト 組				灰 N4/0	
岡13-49	SD010	瓦器 組	(2.9) - *	やや粗	良	火和型
	堀シルト 組			微小砂粒	灰 N6/0	
岡13-50	SD010	瓦器 組	* - (0.9) - *	面	良	火和型
	堀シルト 組				灰 N6/0	
岡13-51	SD010	瓦器 組	* - (1.8) - *	面	良	
	堀シルト 組			体部片	灰白 N7/0	
岡13-52	SD010	瓦質土器 組	(29.0) - 15.3 - (9.5)	粗	不良	C型式
岡版11		壺	20%	~ 1mm石英・長石・黒色粒	暗灰 N3/0	
岡13-53	SD010	瓦質土器 組	* - (4.1) - (10.5)	やや粗	良	
	堀シルト 組		20%	~ 2mm長石・クサリ鐵	灰白 2.5YB8/1	
岡13-54	SD010	瓦質土器 組	* - (5.0) - *	やや粗	良	
	堀シルト 組			口縁部分	灰 N4/0	
岡13-55	SD010	瓦質土器 組	* - (4.9) - *	やや粗	良	
	堀シルト 組			口縁部分	灰 N5/0	
岡13-56	SD010	瓦質土器 組	* - (6.9) - *	やや粗	良	火和型
岡版11	堀シルト 組			円形溝跡	灰白 N8/0	
岡13-57	SD010	石製品 組	1.3 - 1.1 - 1.2 - 1.3g	石質	良	
岡版11	堀シルト 組			器物(白)		
岡14-58	SD010	瓦 丸瓦	(10.3) - (10.7) - (4.3)	やや粗	良	
	堀シルト 組				~ 3mm石英・長石・黒色粒	灰 N6/0
岡14-59	SD010	瓦 丸瓦	(10.9) - (6.0) - (7.8)	粗	不良	
岡版11	堀シルト 組				~ 3mm石英・長石・クサリ鐵	灰 N5/0
岡14-60	SD010	瓦 平瓦	(14.3) - (14.5) - (3.5)	やや粗	良	
岡版11	堀シルト 組				~ 4mm長石	灰白 N7/0
岡14-61	SD010	瓦 平瓦	(17.1) - 23.6 - 6.2	やや粗	良	
岡版12	堀シルト 組				~ 3mm石英・長石	暗灰 N3/0
岡15-62	SD010	土師器 組	7.4 - 1.6 - *	やや粗	良	
岡版12			99%		~ 2mm石英・長石・雲母	にぶい褐色 7.5YR6/4
岡15-63	SD010	瓦 丸瓦	(4.2) - (8.0) - (2.1)	粗	不良	
岡版12	瓦貼				~ 1mm石英・長石・クサリ鐵	灰白 N7/0
岡15-64	SD010	瓦 丸瓦	(5.9) - (7.8) - (3.7)	粗	良	
岡版12	瓦貼				~ 2mm石英・長石	灰 N5/0
岡15-65	SD010	瓦 丸瓦	(9.7) - (11.8) - 3.9	やや粗	良	
岡版12	瓦貼				~ 3mm石英・長石	灰 N5/0
岡15-66	SD010	瓦 丸瓦	(21.6) - (18.7) - 8.2	やや粗	不良	
岡版12	瓦貼				~ 3mm石英・長石・クサリ鐵	暗灰 N3/0
岡15-67	SD010	瓦 丸瓦	(30.8) - 21.5 - 4.8	やや粗	良	調切瓦
岡版13	瓦貼				~ 3mm石英・長石	灰白 N7/0
岡16-68	SD010	瓦 丸瓦	(33.1) - 28.0 - 7.5	やや粗	良	調切瓦
岡版13	瓦貼				~ 3mm長石	灰 N4/0

表4 報告遺物一覧(3)

51

報告No 認定番号	出土遺構 層位	種別 器種	口径・高さ・底径(cm) 残存率	施土・素材	焼成・色調	特記事項
国16-69 SD010	瓦 灰點	瓦 平瓦	(14.0) - 6.3 - 2.5	やや粗 ~2mm長石	良 灰N4/0	側切丸
国16-70 SD010	瓦 灰點	瓦 平瓦	(18.5) - (10.0) - 2.6	やや粗 ~3mm長石	良 灰N4/0	側切丸
国16-71 SD010	瓦 灰點	瓦 平瓦	(12.7) - (13.7) - 3.8	やや粗 ~4mm長石・カサリ難	良 暗灰N3/0	
国17-72 SD015	土師器 皿	土師器 皿	(18.0) - 2.0 - *	やや粗 10%	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難・全空洞	組A 粗5YR6/6
国17-73 SD015	土師器 皿	土師器 皿	(23.0) - 2.3 - *	やや粗 10%	不良 ~2mm石英・長石・カサリ難	組A 粗5YR6/6
国17-74 SD015	土師器 皿	土師器 皿	(7.6) - (4.5) - *	粗 1mm断片	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難	灰白10YR8/1
国17-75 SD015	土師器 皿	土師器 皿	* - (1.3) - *	やや粗 20%	良 ~1mm長石	N6/0
国17-76 SD015	土師器 皿	土師器 皿	* - (1.6) - (6.2)	やや粗 20%	良 ~1mm石英・長石	杯B 灰N6/0
国17-77 SD015	土師器 皿	土師器 皿	(14.0) - 3.6 - *	やや粗 20%	良 ~2mm小砂粒	杯A 灰N8/0
国17-78 SD015	土師器 皿	土師器 皿	* - (6.5) - *	やや粗 体部断片	良 ~1mm石英・長石・黒色粒	組A 白N9/0
国18-79 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(13.6) - (3.2) - *	粗 20%	不良 ~1mm長石・カサリ難	組C 粗5YR6/6
国18-80 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (3.2) - *	粗 体部断片	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難	組A 粗7.5YR7/6
国18-81 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (4.2) - *	粗 体部断片	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難	組A 粗7.5YR7/6
国18-82 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (2.5) - *	やや粗 体部断片	良 ~1mm長石	組C 黑褐2.5Y3/1
国18-83 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (2.5) - *	粗 体部断片	良 ~2mm石英・長石・カサリ難	組A 粗5YR7/6
国18-84 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (2.1) - *	粗 体部断片	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難	組A 粗5YR6/8
国18-85 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (2.2) - *	粗 体部断片	不良 ~1mm石英・長石・カサリ難	組A 粗5YR6/8
国18-86 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (4.1) - *	粗 口縁断片	不良 ~2mm石英・長石・カサリ難	粗5YR6/6
国18-87 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (5.3) - *	粗 口縁断片	不良 ~3mm長石・石英・カサリ難	粗5YR6/8
国18-88 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(8.0) - (3.5) - *	粗 口縁断片	不良 ~2mm石英・長石	
国18-89 SD020	土師器 皿	土師器 皿	20%	良 口縁断片	浅黄褐10YR8/4	
国18-90 SD020	土師器 皿	土師器 皿	8.1 - 9.4 - 2.2	やや粗 口縁断片	良 N6/0	
国18-91 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(12.2) - (2.1) - *	粗 皿	良 30%	
国18-92 SD020	土師器 皿	土師器 皿	* - (1.4) - *	やや粗 口縁断片	良 ~2mm長石・黒色粒	N6/0
国18-93 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(6.0) - (8.8) - (2.7)	粗 軒平瓦	不良 ~5mm石英・長石	灰白N8/0
国18-94 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(5.1) - (6.4) - 2.7	やや粗 軒平瓦	良 ~2mm石英・長石	N5/0
国18-95 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(4.6) - (3.0) - 2.4	やや粗 軒平瓦	良 ~4mm石英・長石	灰白N8/0
国18-96 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(10.1) - (5.8) - (6.1)	粗 丸瓦	不良 ~4mm石英・長石・カサリ難	暗灰10YR5/1
国18-97 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(25.5) - (15.7) - (8.5)	やや粗 丸瓦	良 ~5mm長石	灰白NR8/0
国18-98 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(23.4) - 14.0 - 7.1	やや粗 丸瓦	良 ~3mm石英・長石・カサリ難	N5/0
国18-99 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(7.8) - (10.4) - (4.6)	やや粗 丸瓦	不良 ~4mm石英・長石	N6/0
国18-100 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(21.2) - (14.0) - 5.0	粗 丸瓦	不良 ~4mm石英・長石	N6/0
国18-101 SD020	土師器 皿	土師器 皿	(17.8) - (17.3) - 5.1	粗 平瓦	不良 ~3mm石英・長石・カサリ難	灰白N7/0
国18-102 SD030	土師器 皿	土師器 皿	8.2 - 1.3 - *	やや粗 40%	良 ~2mm石英・長石・カサリ難	粗5YR7/6
国18-103 SD030	土師器 皿	土師器 皿				

表5 報告遺物一覧 (4)

報告書 固編No.	出土遺構 層位	種別 器種	口径・器高・底径(cm) 残存率	地土・石材	焼成・色調	特記事項
岡20-103	SD030	土師器 盤	(10.4) - 2.0 - *	粗 50%	不良 橙SYR0/B	
岡版16	灰褐色 盤		~ 3mm石英・長石・ケサリ繊			
岡20-104	SD030	土師器 盤	* - (3.5) - *	や少粒 口縁部切	不良 ~ 1mmケサリ繊・微小砂粒	大和H型
岡版16	灰褐色 盤					
岡20-105	SD030	瓦器 碗	* - (2.0) - *	密 口縁部切	良 灰N5/0	大和型
岡20-106	SD030	瓦器 碗	* - (1.1) - *	密 底部片	良 灰N5/0	大和型
岡20-107	SD030	瓦質土器 盤	* - (5.8) - *	や少粒 口縁部切	良 ~ 1mm長石	
岡版16	灰褐色 盤				灰灰 7.5YR4/1	
岡20-108	SD030	瓦質土器 盤	* - (4.2) - (9.2) 20%	や少粒 微少砂粒	良 灰少粒	C型式
岡版16	灰褐色 盤				浅黄橙 7.5YR8/6	
岡20-109	SD030	土師器 盤	7.0 - 1.5 - *	や少粒 20%	良 ~ 1mm長石・金雲母・ケサリ繊	
岡版16	灰褐色 盤				にぶい黄橙 10YR6/3	
岡20-110	SD030	土師器 盤	7.8 - 1.3 - *	や少粒 80%	良 ~ 2mm石英・長石・金雲母・ケサリ繊	
岡版16	灰褐色 盤				にぶい黄橙 7.5YR6/4	
岡20-111	SD030	土師器 盤	(20.0) - (4.5) - *	や少粒 10%	良 ~ 2mm石英・長石・ケサリ繊・金雲母	大和I型
岡版16	灰褐色 盤				浅黄橙 10YR8/4	
岡20-112	SD030	瓦質土器 盤	* - (8.3) - *	や少粒 体部切	良 微少砂粒	
岡版16	灰褐色 盤				灰白 N7/0	
岡20-113	SD030	瓦質土器 盤	* - (7.8) - *	や少粒 口縁部切	良 ~ 5mm石英・長石	
岡版16	灰褐色 盤				灰白 10YR8/1	
岡20-114	SD030	輪入磁器 打	(13.2) - (5.6) - *	密 20%	良 青磁釉	オリーブ灰 10Y5/2 (輪)
岡版17	灰褐色 打				灰 N6/0	鹿屋
岡20-115	SD030	金属製品 打	15.9 - 2.0 - 1.6 - 114.9g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-116	SD030	金属製品 打	16.1 - 1.9 - 1.5 - 100.5g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-117	SD030	金属製品 打	15.9 - 1.8 - 1.8 - 96.0g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-118	SD030	金属製品 打	14.5 - 1.8 - 2.2 - 120.5g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-119	SD030	金属製品 打	15.7 - 2.1 - 2.2 - 54.4g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-120	SD030	金属製品 打	16.0 - 3.2 - 2.8 - 97.1g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡20-121	SD030	金属製品 打	15.1 - 3.0 - 2.7 - 72.6g	鉄 打		
岡版17	灰褐色 打					
岡21-122	SK035	土師器 杯	* - (4.4) - *	や少粒 体部切	不良 ~ 2mm石英・長石・ケサリ繊	
岡版17	褐色 杯				橙SYR0/B	
岡21-123	SK035	土師器 杯	(13.2) - 2.6 - *	や少粒 20%	不良 ~ 2mm長石・ケサリ繊	
岡21-124	SK035	直腹器 杯	* - (2.6) - *	や少粒 体部切	不良 微少砂粒	
岡版17	褐色 杯				灰白 N8/0	
岡21-125	SK035	土師器 杯	(10.0) - (6.7) - (1.8)	や少粒 底部切	不良 ~ 2mm石英・長石・ケサリ繊	「宮」墨書きあり
岡版17	褐色物削 杯				橙SYR6/6	
岡21-126	SK035	土師器 瓶	(6.0) - (7.5) - 1.0	や少粒 底部切	良 ~ 3mm石英・長石・ケサリ繊	朱墨書きあり
岡版17	褐色物削 瓶				橙SYR7/8	
岡21-127	SK035	土師器 杯	* - (3.1) - *	密 口縁部切	不良 微少砂粒	杯 A
岡版17	褐色物削 杯				明赤橙 2.5YR5/6	
岡21-128	SK035	土師器 杯	* - (3.7) - *	や少粒 体部切	不良 微少砂粒	杯 A
岡21-129	SK035	土製品 壺	10.9 - 11.4 - 2.9	や少粒 100%	良 ~ 4mm長石	灰白 N7/0
岡版17	褐色物削 壺					
岡21-130	SK035	直腹器 壺	* - (1.6) - *	密 口縁部切	良 微少砂粒	
岡版17	褐色物削 壺				灰白 N7/0	
岡21-131	SK035	土製品 不明	(7.3) - (5.3) - (6.0)	や少粒 不明	良 ~ 4mm石英・長石	丸鉢用
岡版17	褐色物削 不明				橙 SYR7/8	
岡21-132	SK035	土製品 縞引口	(8.2) - (7.4) - (3.7)	粗 縞引口	不良 ~ 5mm石英・長石	
岡版17	褐色物削 縞引口				橙 2.5YR7/8	
岡21-133	SK035	土製品 縞引口	(4.7) - (6.4) - 2.4	粗 縞引口	不良 ~ 6mm石英・長石	にぶい黄橙 10YR6/4
岡21-134	SK035	土製品 縞引口	(3.7) - (4.7) - (2.5)	粗 縞引口	不良 ~ 3mm石英・長石	
岡21-135	SK035	土製品 縞引口	(7.3) - (5.3) - (3.1)	粗 縞引口	良 ~ 5mm石英・長石	
岡22-135	SK035	土製品 縞引口	(7.3) - 5.4 - 3.6	粗 縞引口	良 ~ 5mm石英・長石	橙 7.5YR6/6
岡版17	褐色物削 縞引口					
岡22-136	SK035	土製品 縞引口	(5.3) - (3.0) - (3.1)	粗 縞引口	良 ~ 4mm石英・長石	橙 7.5YR6/8
岡版17	褐色物削 縞引口					

表6 報告遺物一覧(5)

報告No.	出土遺構 箇所	種別 器種	口径・高さ・底径(cm) 残存部	地質・素材	焼成・色調	特記事項
岡22-137	SK035	土製品 鉢型	(7.9) - 5.1 - 4.2	粗 ~5mm石英・長石	良 粗 5YR6/8	
岡22-138	SK035	土製品 鉢型	(5.3) - (3.6) - (3.6)	粗 ~6mm石英・長石・金雲母	不良	
岡22-139	SK035	土製品 鉢型	(3.0) - (4.2) - 2.1	粗 ~2mm石英・長石・金雲母	不良	
岡22-140	SK035	土製品 鉢型	(3.0) - (6.0) - (2.4)	粗 ~5mm石英・長石・金雲母	不良	
岡22-141	SK035	土製品 鉢型	(4.7) - (4.1) - (2.3)	粗 ~5mm石英・長石	不良	
岡22-142	SK035	土製品 鉢型	(9.7) - (4.5) - (2.6)	粗 ~4mm石英・長石・金雲母	良 粗 5YR6/8	
岡22-143	SK035	土製品 鉢型	(8.1) - (3.8) - 3.0	粗 ~2mm石英・長石・金雲母	良 粗 5YR6/8	
岡22-144	SK035	木製品	(10.2) - (2.2) - 0.7			
岡22-145	SK035	土製品 不明	" - (2.6) - "	中空粗 体部片	良 ~1mm石英・長石・クサリ鐵・金雲母	RF G
岡23-146	SX025	土師器 杯	" - (1.1) - "	中空粗 体部片	良 ~1mm石英・長石・クサリ鐵・金雲母	明赤褐色 2.5YR5/6
岡23-147	SX025	土師器 釜	" - (4.4) - "	中空粗 門部片	良 ~1mm長石・クサリ鐵	浅黃褐色 10YR8/4
岡23-148	SX025	黑色土器 碗	" - (3.0) - "	中空粗 体部片	良 ~1mm長石・クサリ鐵	浅黃褐色 7.5YR8/6
岡23-149	SX025	灰器 碗	" - (1.6) - (6.4)	中空粗 底面部片	良 ~1mm砂粒	A類
岡23-150	素掘小溝 (5-1)	土師器 口縁部片	" - (3.6) - "	粗 ~1mm長石・クサリ鐵	不良	
岡24-151	素掘小溝 (5-1)	土師器 口縁部片	" - (2.8) - "	中空粗 ~1mm長石・クサリ鐵	不良 明赤褐色 5YR5/6	
岡24-152	素掘小溝 (5-6)	土師器 碗	" - (2.2) - "	中空粗 口縁部片	良 ~2mm長石・クサリ鐵・石英	粗 5YR7/6
岡24-153	素掘小溝 (5-2)	土師器 碗	" - (1.8) - "	中空粗 口縁部片	良 ~1mm砂粒	明赤褐色 10YR6/1
岡24-154	素掘小溝 (5-2)	灰器 口縁部片	" - (1.9) - "	中空粗 ~1mm砂粒	不良 灰白色 N7/0	大和型
岡24-155	素掘小溝 (5-6)	土製品 修理	(7.3) - (10.1) - 4.2	粗 ~10mm石英・長石	不良 粗 2.5YR7/8	
岡27-156	SD018	土師器 壺	" - (2.0) - "	粗 底面部片	良 ~3mm石英・長石・クサリ鐵	にふい體 7.5YR6/4
岡27-157	SD018	土師器 高杯	" - (6.8) - "	粗 脚柱部片	不良 ~2mm石英・長石	粗 2.5YR6/8
岡27-158	SD018	土師器 高杯	" - (5.7) - "	粗 脚柱部片	不良 ~4mm石英・長石・クサリ鐵	粗 5YR6/8
岡28-159	SX040	土師器 壺	(17.0) - 4.6 - (12.2)	粗 20%	不良 ~3mm長石・クサリ鐵	S-10 刃砂
岡28-160	SX040	土師器 壺	" - (2.3) - "	粗 体部片	不良 ~3mm石英・長石・クサリ鐵	杯 B
岡28-161	SX040	土師器 壺	" - (1.5) - "	粗 口縁部片	不良 ~4mm石英・長石・クサリ鐵	S-10 刃砂
岡28-162	SX040	土師器 壺	(17.2) - 3.2 - "	中空粗 60%	良 ~5mm長石・黑色泥粒	にふい體 7.5YR7/4
岡28-163	SX040	土師器 壺	(16.8) - (2.1) - "	中空粗 20%	良 ~2mm長石・黑色泥粒	にふい體 5YR6/4
岡28-164	SX040	土師器 壺	" - (1.5) - "	中空粗 口縁部片	良 ~1mm長石	N7/0
岡28-165	SX040	土師器 壺	" - (1.2) - "	中空粗 口縁部片	良 ~1mm長石	S-10 刃砂
岡28-166	SX040	土師器 壺	" - (2.0) - 11.0	中空粗 20%	良 ~2mm長石・黑色泥粒	RF B
岡28-167	SX040	土師器 壺	" - (4.1) - "	中空粗 体部片	良 ~2mm石英・長石・黑色泥粒	杯 B
岡28-168	SX040	土師器 壺	" - (1.7) - "	中空粗 底面部片	良 ~2mm長石	杯 B
岡28-169	SX040	土師器 壺	" - (2.5) - (8.4)	中空粗 10%	良 ~3mm石英・長石・クサリ鐵・黑色泥粒	灰白色 N7/0
岡28-170	SX040	土師器 壺	(12.4) - (4.1) - "	中空粗 10%	良 ~2mm長石・黑色泥粒	灰白色 N7/0

表7 報告遺物一覧 (6)

報告番号 図版番号	出土遺構 部位	種別 器種	口径・器高・底径(cm) 残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
岡28-171 SX040	瓦	(9.8) - (16.5) - 7.2	や少粗	良		
岡版 19 滅砂	軒平瓦		~3mm石英・長石・黒色粒	灰 N5/0		
岡28-172 SX040	瓦	(9.5) - (6.0) - (2.2)	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	軒平瓦		~3mm石英・長石	灰 N5/0		
岡28-173 SX040	瓦	(23.3) - 16.7 - 8.4	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	丸瓦		~7mm石英・長石	灰 N5/0		
岡28-174 SX040	瓦	(10.8) - (8.0) - (3.2)	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	丸瓦		~3mm長石・黒色粒	灰 N6/0		
岡28-175 SX040	瓦	(11.5) - (14.7) - 6.5	や少粗	不良		
岡版 20 滅砂	丸瓦		~4mm石英・長石・黒色粒	にぶい黄褐 10YR7/3		
岡29-176 SX040	瓦	(9.0) - 8.0 - 2.4	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	丸瓦		~2mm石英・長石・カサリ織	灰 N6/0		
岡29-177 SX040	瓦	(11.9) - (9.3) - 7.1	粗	不良	S-10 周砂	
岡版 20 滅砂	丸瓦		~8mm石英・長石	灰 N5/0		
岡29-178 SX040	瓦	(20.5) - 18.9 - 9.5	や少粗	不良	S-10 周砂	
岡版 20 滅砂	丸瓦		~5mm石英・長石	黒 10YR17/1		
岡29-179 SX040	瓦	(10.6) - (6.7) - (4.3)	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	平瓦		~5mm石英・長石	灰 N4/0		
岡29-180 SX040	瓦	(23.4) - (22.4) - (4.9)	や少粗	良		
岡版 20 滅砂	平瓦		~10mm石英・長石・黒色粒	灰白 7.5Y8/1		
岡30-181 SX040	土師器	(30.6) - 7.3 - (19.4)	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 21 灰粘	鉢	50%	~1mm長石・カサリ織・金雲母	にぶい鶴 7.5YR7/4		
岡30-182 SX040	土師器	* - (2.3) - *	や少粗	良	S-10 周粘	
	體部		~2mm石英・長石・カサリ織	黄灰 2.5Y6/1		
岡30-183 SX040	土師器	* - (5.0) - *	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 21 灰粘	鉢		~3mm石英・長石	鶴 5YR7/6		
岡30-184 SX040	土師器	* - (5.5) - *	粗	不良		
岡版 21 灰粘	高杯	40%	~2mm石英・長石・カサリ織・金雲母	明鶴 7.5YR5/6		
岡30-185 SX040	土師器	* - (5.1) - *	や少粗	良		
	杯盤片		微少砂粒	にぶい鶴 5YR7/4		
岡30-186 SX040	土師器	18.5 - 14.0 - 11.0	や少粗	不良		
岡版 21 灰粘	高杯	80%	~4mm石英・長石・カサリ織	鶴 5YR7/8		
岡30-187 SX040	須恵器	* - (4.1) - *	密	良		
岡版 21 灰粘	蓋		~1mm長石・黒色粒	灰 N6/0		
岡30-188 SX040	須恵器	* - (2.2) - *	や少粗	良		
	体部		~3mm石英・長石	灰白 N7/0		
岡30-189 SX040	須恵器	* - (4.0) - *	や少粗	良	S-10 周粘	
	灰粘		~3mm長石・黒色粒	灰 N6/0		
岡30-190 SX040	瓦	(16.7) - (7.8) - (9.8)	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 21 灰粘	丸瓦		~3mm石英・長石	灰 N4/0		
岡30-191 SX040	瓦	(15.9) - (8.1) - (7.3)	や少粗	不良	サブトレ灰周粘・周粘	
岡版 22 灰粘	丸瓦		~3mm石英・長石・カサリ織	にぶい鶴 10YR6/3		
岡30-192 SX040	瓦	(14.7) - (6.4) - (7.8)	や少粗	良	S-10 周粘	
	丸瓦		~2mm長石	灰 N5/0		
岡31-193 SX040	瓦	(14.9) - (16.5) - (6.1)	や少粗	不良		
岡版 21 灰粘	平瓦		~3mm石英・長石・カサリ織	灰 N 4/0		
岡31-194 SX040	瓦	17.0 - (8.7) - 3.3	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 22 灰粘	平瓦		~2mm石英・長石	暗灰 N3/0		
岡31-195 SX040	瓦	(9.6) - (9.8) - (3.8)	や少粗	良	サブトレ灰周粘・周粘	
岡版 22 灰粘	平瓦		~2mm長石・黒色粒	灰白 N7/0		
岡31-196 SX040	瓦	(12.7) - (14.2) - 3.8	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 22 灰粘	平瓦		~2mm石英・長石	灰 N4/0		
岡31-197 SX040	瓦	(18.1) - (22.9) - 6.0	や少粗	良	S-10 周粘	
岡版 22 灰粘	平瓦		~2mm長石	灰白 N7/0		
岡32-198 SX040	瓦	(22.4) - (19.2) - 5.6	や少粗	良	S-10 周粘	
	灰粘		~3mm石英・長石	灰 N4/0		
岡32-199 SX040	木製品	23.4 - 3.1 - 0.7				
岡版 23 灰粘	漆串					
岡32-200 SX040	木製品	(12.5) - 3.0 - 3.0				
岡版 23 灰粘	加工木					
岡32-201 SX040	木製品	(9.3) - 1.8 - 1.1				
岡版 23 灰粘	加工木					
岡32-202 SX040	木製品	(36.5) - 8.0 - 5.8				
岡版 23 灰粘	原作					
岡33-203 SX040	土師器	(9.0) - (6.6) - *	粗	不良		
岡版 23 灰粘	蓋	20%	~3mm石英・長石・カサリ織・金雲母	にぶい鶴 7.5YR5/4		
岡33-204 SX040	土師器	* - (4.1) - *	粗	不良		
岡版 23 灰粘	蓋		~4mm石英・長石・カサリ織・金雲母	鶴 2.5YR6/8		

表 8 報告遺物一覧 (7)

55

報告No	出土遺構 箇所No.	種別 器種	口径・最高・底径 (cm) 断面写真	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
岡33-205	SX040	土師器 杯	* - (2.5) - *	やや粗 口縁部片	~2mm石英・長石・カサリ繊 粗	不良
岡33-206	SX040	土師器 杯	* - (3.6) - *	粗 口縁部片	~2mm石英・長石・カサリ繊 金芸母	不良
岡33-207	SX040	土師器 高杯	* - (2.5) - *	粗 脚部片	~4mm石英・長石・カサリ繊	不良
岡33-208	SX040	土師器 高杯	* - (7.5) - *	やや粗 脚柱部	~2mm石英・長石・カサリ繊	粗 7.5YR6/6
岡33-209	SX040	須彌器	(13.0) - 4.4 - *	やや粗	粗	
岡歴23	褐色砂	蓋	20%	~1mm長石・黒色粒	灰 N5/0	
岡歴23	SX040	須彌器	* - (3.8) - *	密	粗	
岡歴23	褐色砂	蓋	体部片	~1mm長石	灰 N4/0	
岡33-211	SX040	須彌器	* - (2.6) - *	密	粗	
岡歴23	褐色砂	蓋	口縁部片	~1mm長石・黒色粒	灰白 N7/0	
岡33-212	SX040	須彌器	* - (3.8) - *	密	粗	
岡歴23	褐色砂	蓋	体部片	~1mm石英・長石・黒色粒	灰 N6/0	
岡33-213	SX040	須彌器	* - (2.7) - *	密	粗	
岡歴23	褐色砂	杯	口縁部片	~2mm石英・長石	灰 N5/0	
岡33-214	SX040	土師器	(8.4) - (7.9) - *	やや粗	粗	
岡歴23	褐色砂	壺	70%	~5mm長石・石英・カサリ繊	にぶい粗 5YR7/4	
岡33-215	SX040	土師器	* - (6.5) - *	やや粗	不良	
岡歴23	褐色砂	壺	40%	~4mm石英・長石・カサリ繊・黒色粒	にぶい粗 7.5YR7/4	
岡33-216	SX040	土師器	* - (3.8) - *	やや粗	粗	
岡歴23	褐色砂	杯	口縁部片	~3mm石英・長石	にぶい粗 7.5YR7/3	
岡33-217	SX040	土師器	* - (6.6) - *	やや粗	粗	
岡歴24	褐色砂	高杯	40%	~2mm長石・石英・カサリ繊	粗 2.5YR6/6	
岡歴24	表土	土師器	* - (10.5) - *	密	粗	
岡歴24	高杯	脚柱部	~5mm石英・長石・カサリ繊	粗 2.5YR6/8		
岡34-219	表土	須彌器	11.0 - 4.2 - *	密	粗	
岡歴24	杯	100%	~2mm長石・黒色粒	灰 N6/0		
岡34-220	表土	瓦	(9.4) - (12.7) - 4.7	粗	粗	
岡歴24	軒平瓦	瓦	~5mm石英・長石	灰 N5/0		
岡34-221	表土	瓦	(7.6) - (12.6) - (4.3)	やや粗	粗	
岡歴24	丸瓦	瓦	~2mm石英・長石・カサリ繊	灰白 2.5Y7/1		
岡34-222	表土	瓦	(8.4) - (8.5) - 2.9	やや粗	粗	調切瓦
岡歴24	平瓦	瓦	~7mm石英・長石・カサリ繊	灰白 N7/0		
岡34-223	表土	瓦	(16.0) - (14.7) - 3.6	やや粗	不良	
岡歴24	平瓦	瓦	~3mm石英・長石・カサリ繊	灰白 10YR7/1		
岡34-224	表土	土製品	* - (7.5) - *	やや粗	良	丸瓦転用
岡歴24	不明	不明	~5mm石英・長石	灰 N5/0		

表9 検出遺構および出土遺物一覧（1）

表 10 検出遺構および出土遺物一覧（2）

57

5番号	層位	遺構番号	遺構面	種別	所見	出土遺物	地区
37	矢面						
38	矢面						
39	矢面						
40	灰粘	SX040	Z	落ち込み		堅材・加工木・自然木 土師器(古墳) 壺・壺・高杯、須恵器(古墳) 杯・壺・高杯、須恵器(古代) 壺、平瓦・丸瓦、蓋串、炭化物・桃核	A・B 10・11
	淡陶砂					土師器(古墳) 壺・壺・高杯、土師器(古代) 杯・壺、須恵器(古墳) 杯・壺、須恵器(古代) 杯・壺・蓋、蓋串、石材(石英)、軒平瓦・平瓦・丸瓦、楊羽口	
	褐灰砂					土師器(古墳) 壺・壺・高杯・鉢・壺、須恵器(古墳) 杯・壺・壺・高杯、加工木・自然木・炭化材・木片・桃核	
	褐灰砂					土師器(古墳) 壺・壺・高杯・鉢・壺、須恵器(古墳) 杯・壺・壺・高杯、石材(石英)、平瓦・丸瓦、木片	
	物地土					土師器(古代) 瓢穴、須恵器(古代) 壺、平瓦・丸瓦	
	整地土					土師器(古墳) 壺・鉢・高杯・壺、土師器(古代) 杯・壺・壺・須恵器・移動式窯、須恵器(古墳) 杯・はそう、須恵器(古代) 壺・杯・蓋・盤、砾石・石材(石英)、平瓦・丸瓦・土鍬・木片、不明耐熱品・瓦錠	
	表土					土師器(古墳) 壺・高杯・壺・鉢、土師器(古代) 杯・高杯・壺・移動式窯、土師器(中世～) 盆・釜、須恵器(古墳) 杯・壺、須恵器(古代) 壺・杯・蓋、瓦錠・瓦瓦土器・瓦錠・鉢・盆・釜、圓座陶器・石材(石英)、軒平瓦・平瓦・丸瓦・木片・瓦錠・骨	

写真図版



第1 遺構面全景（南から）



SD010 土層断面（北から）



SD010・015 土層断面（北から）

図版 2



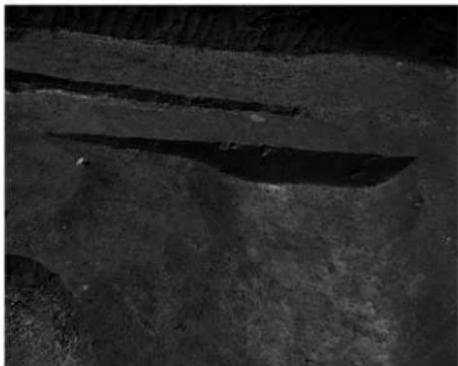
SD010・015・020 土層断面（南から）



SD020 土層断面（北から）



SD030 土層断面（西から）



SX025 土層断面（西から）



SK035 検出状況（西から）



SK035 土層断面（西から）

図版 4



第2遺構面全景（南から）



SX018 土層断面（西から）



SX040 土層断面（南から）



SX040 完掘状況（北西から）



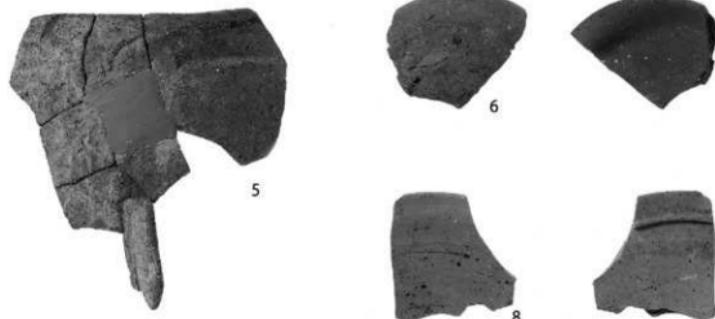
南壁（北から）



東壁（南西から）

図版 6

整地土 (1 ~ 6 • 8 ~ 10 • 12)



図版 7

整地土 (13・14・16～18)



13



14



16



17

18



図版 8

整地土 (19・20・23～26)



19



20



23



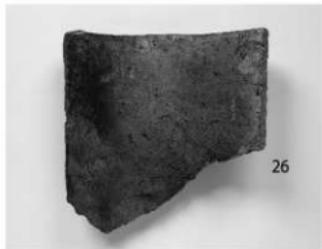
24



25



26



整地土 (27・29～32)



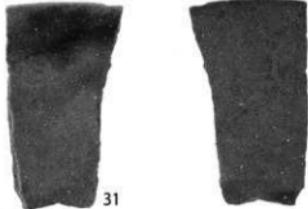
27



29



30



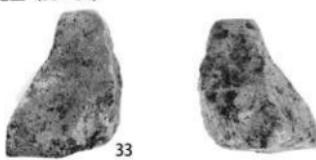
31



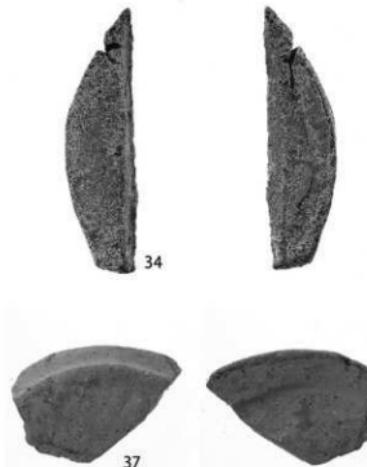
32

図版 10

整地土 (33・34)



SD010 (36・37・39・41～43)



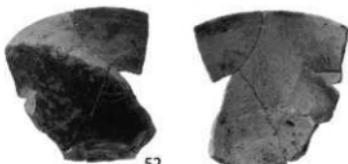
SD010 (45・52・56～60)



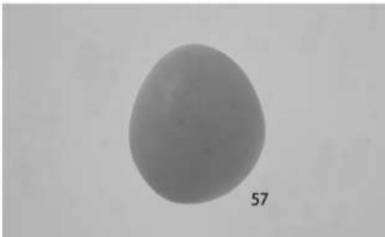
45



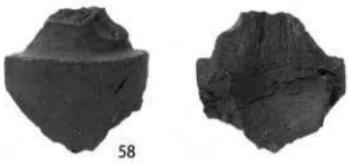
56



52



57



58



59

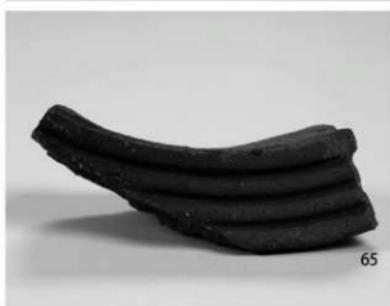


60

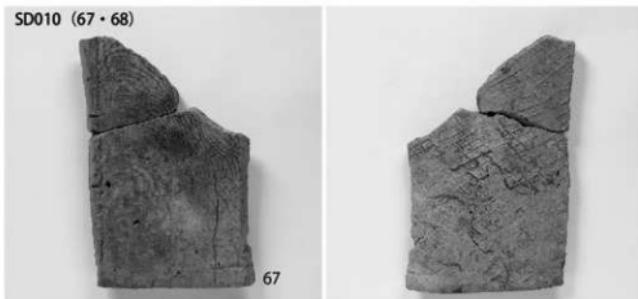


図版 12

SD010 (61 ~ 66)



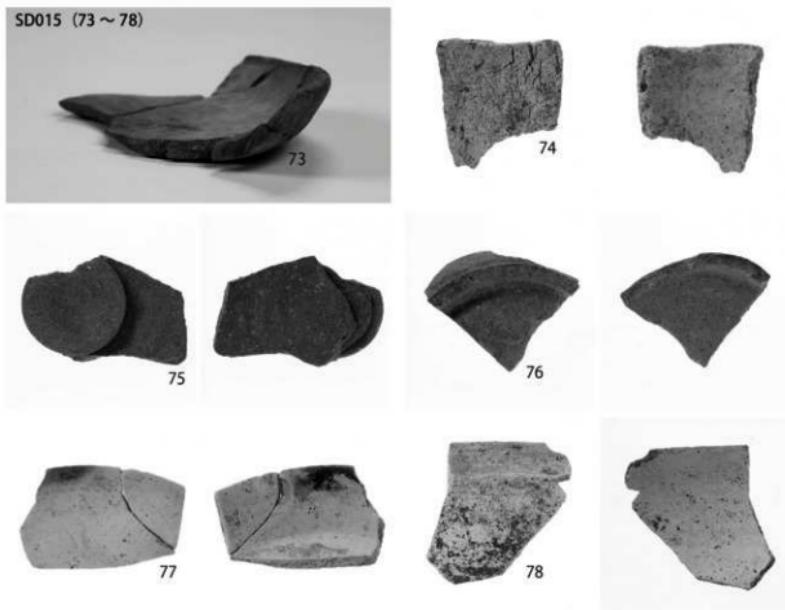
SD010 (67・68)



67

68

SD015 (73～78)



73

74

75

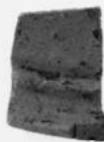
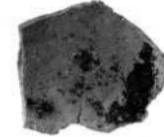
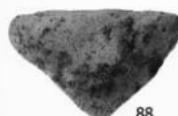
76

77

78

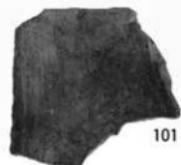
図版 14

SD020 (79・82・87～93)



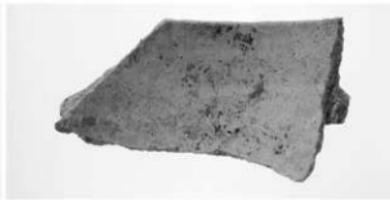
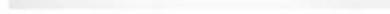
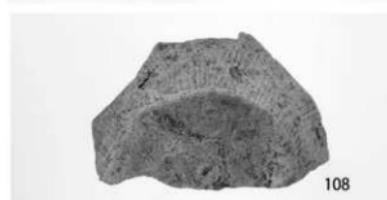
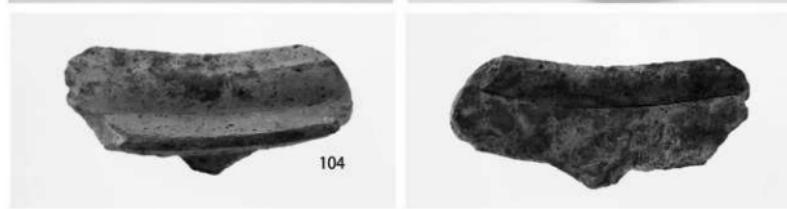
93

SD020 (94・95・97～101)

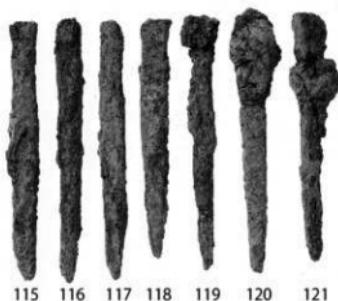


図版 16

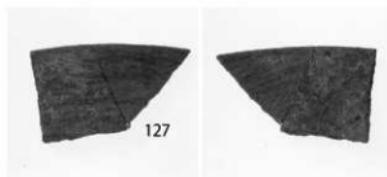
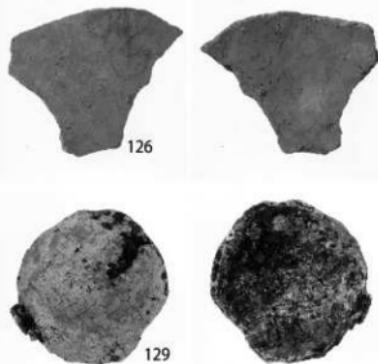
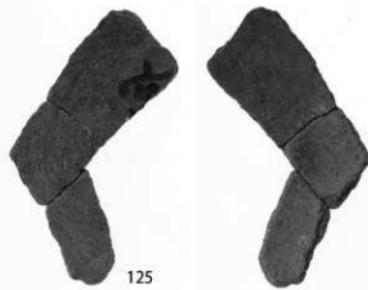
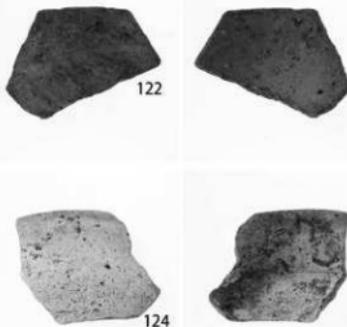
SD030 (102 ~ 104 • 107 • 108 • 110 • 112 ~ 114)



SD030 (115 ~ 121)

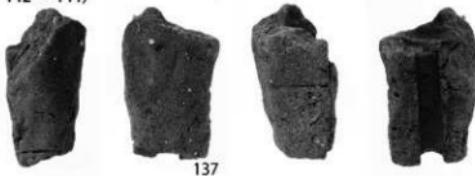


SK035 (122 • 124 ~ 127 • 129 • 131 • 132 • 135)



図版 18

SK035 (137 ~ 139 + 142 ~ 144)



137

138

139



142



143

SX025 (146 + 148)



144

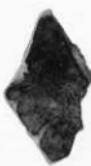


146



148

SX025 (149)



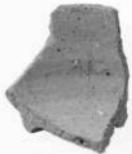
素掘小溝 (155)



SD018 (157・158)

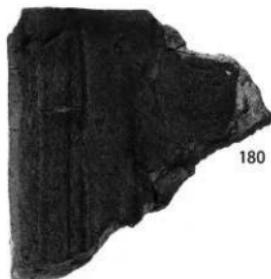
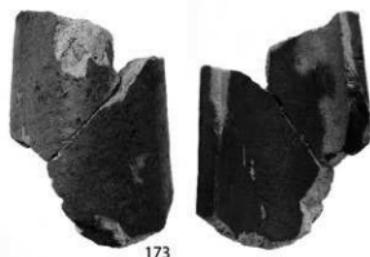


SX040 (162・167・169・171)

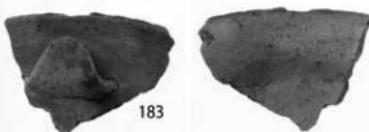


図版 20

SX040 (173・175・176・178～180)



SX040 (181・183・184・186・187・190・191・193)



図版 22

SX040 (195 ~ 197)



195



196



197

SX040 (199~202・209・210・213・214)



图版 24

SX040 (217)



217

表土 (218 ~ 221 • 223 • 224)



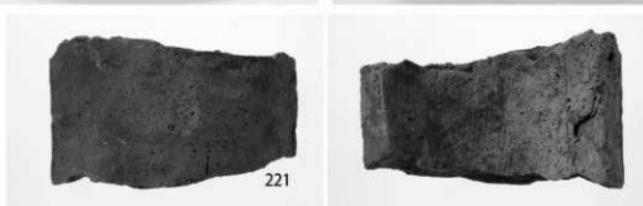
218



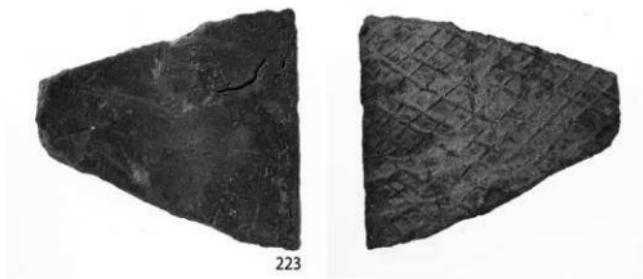
219



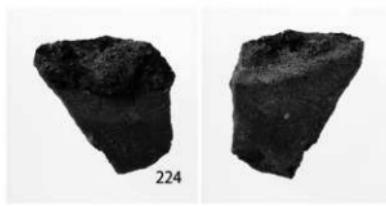
220



221



223



224

報告書抄録

藤原京右京十二条三坊・石川廢寺

—平成 28 年度発掘調査報告書—

2018.3.31

(発行・編集) 公益財団法人 元興寺文化財研究所

(印刷) 株式会社 明新社